

Oracle Internet File System for Windows NT/2000

インストール・ガイド

リリース 9.0.1

2001 年 12 月

部品番号 : J04937-01

ORACLE®

Oracle Internet File System for Windows NT/2000 インストール・ガイド, リリース 9.0.1

部品番号 : J04937-01

原本名 : Oracle Internet File System Installation Guide, Release 9.0.1.1.0 for Microsoft Windows NT/2000

原本部品番号 : A85272-03

原本著者 : Francine Hyman

原本協力者 : Sudhanshu Garg, Scott Harrison, Mei Hong, Vasant Kumar, David Pitfield, Hanne Rasmussen, Luis Saenz, David Tom, Alan Wiersba, Kelli Wiseth

Copyright © 1999, 2001, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
構成	vi
関連マニュアル	vii
表記規則	viii
1 概要	
Oracle 9iFS ドメイン	1-2
サービスとサーバー	1-4
ロケータ	1-5
保護ノードと非保護ノード	1-5
HTTP ノード	1-5
Oracle 9iFS 管理ツール	1-5
Oracle Enterprise Manager コンソール	1-6
Oracle 9iFS Manager	1-7
Oracle 9iFS Configuration Assistant	1-7
2 インストール前の処理	
ハードウェア要件およびソフトウェア要件	2-2
ハードウェア要件	2-2
オペレーティング・システム要件	2-3
データベース初期化パラメータ要件	2-4
配置オプションおよび必要なソフトウェア・コンポーネント	2-4

インストール前の作業	2-6
作業 1: 必要なアカウント、パスワードおよびサービス情報の収集	2-7
作業 2: ハードウェア要件およびソフトウェア要件の検証	2-7
作業 3: 既存のデータベースおよびログ・ファイルのバックアップ	2-7
作業 4: Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースのインストール (またはこれらリリースへのアップグレード)	2-8
作業 5: データベース・パラメータの確認	2-9
作業 6: Oracle JVM がデータベースにインストールされているかの確認	2-9
作業 7: ネット・サービス名およびリスナーの構成	2-10
作業 8: 中間層マシンまたは Oracle9i ホームの準備	2-10
作業 9: Oracle 9iFS のインストールに必要なプロセスの起動	2-11

3 Oracle 9iFS ソフトウェアのインストール

Oracle Universal Installer の実行	3-2
Configuration Assistant の実行	3-3

4 インストール後の処理

構成完了後に必要な作業	4-2
コンピュータおよび Oracle サービスの再起動	4-2
Oracle 9iFS の起動および基本的な操作の確認	4-3
Windows ユーザーが Oracle 9iFS をネットワーク・ドライブとして割当て可能にする方法	4-6
インストール後のオプションの作業	4-7
Oracle 9iFS メール・サーバーのインストールおよび構成	4-7
Oracle 9iFS Portlet のインストール	4-8
NFS サーバーの構成	4-10
JRE 1.3.0 の使用のサポートに必要な変更	4-15
Oracle 9iFS サブレットおよび Oracle HTTP Server	4-16

5 Oracle Enterprise Manager の使用

Oracle Enterprise Manager の設定	5-2
Oracle Enterprise Manager の自動操作をサポートするための Oracle 9iFS の設定	5-4

6 クライアント・パッケージのインストール

Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール	6-2
HTTP を介した Oracle 9iFS へのアクセス	6-3
Oracle 9iFS Portlet の Oracle Portal への登録	6-3
Oracle 9iFS FileSync ユーティリティのインストール	6-5
コマンドライン・クライアント・ユーティリティのインストール	6-6
NFS クライアントの構成	6-7
Solaris 7 または 8	6-8
Red Hat Linux 6.2	6-8
Hummingbird NFS Maestro 7.0	6-9
NFS Maestro Network Access Tool を使用した NFS ディレクトリへのリンク	6-11
コマンドラインを使用した NFS ディレクトリへのリンク	6-13
トラブルシューティング	6-14

7 トラブルシューティング

インストール時の問題のトラブルシューティング	7-2
クラスパスの障害	7-2
インストール時の一般的なエラー	7-2
Oracle Enterprise Manager の問題のトラブルシューティング	7-5
オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問合せ	7-6

索引

はじめに

このマニュアルでは、Microsoft 社の Windows NT/2000 システムに Oracle Internet File System (Oracle 9iFS) をインストールする方法を説明します。次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [構成](#)
- [関連マニュアル](#)
- [表記規則](#)

対象読者

このマニュアルに記載されている構成およびインストールの説明は、Windows NT システムまたは Windows 2000 システムの管理者または Oracle 製品のインストールを行う担当者を対象にしています。一部のコマンド例についての説明は記載されていますが、このマニュアルの目的は Oracle 製品または Windows NT/2000 サーバーの管理について説明することではありません。このマニュアルは、Oracle 製品および Windows NT システムまたは Windows 2000 システムの管理に関する基本的な事項を読者が理解していることを前提にしています。

構成

このマニュアルは、次の各章で構成されています。

第 1 章「概要」

第 1 章では、Oracle 9iFS ドメイン、Oracle Enterprise Manager の統合および Oracle 9iFS の管理など、管理上の基本概念について説明します。

第 2 章「インストール前の処理」

第 2 章では、ハードウェアとソフトウェアの要件、配置オプションおよび設定前の確認事項について説明します。

第 3 章「Oracle 9iFS ソフトウェアのインストール」

第 3 章では、Oracle 9iFS をインストールおよび構成する手順について説明します。

第 4 章「インストール後の処理」

第 4 章では、Oracle 9iFS サーバーの起動と停止、Oracle Text の設定、索引付け機能の起動および NFS (Network File System) サーバーのインストールと構成について説明します。NFS プロトコルは、UNIX プラットフォームでファイルを共有するための標準プロトコルとして広く使用されています。ただし、オペレーティング・システムに依存しないため、Microsoft Windows などの他のプラットフォームでも実装できます。

第 5 章「Oracle Enterprise Manager の使用」

第 5 章では、Oracle 9iFS とともに使用する Oracle Enterprise Manager と Oracle Management Server のインストールと構成方法、および Windows NT と Windows 2000 で Oracle Enterprise Manager の作業の自動化をサポートする方法について説明します。

第 6 章「クライアント・パッケージのインストール」

第 6 章では、Microsoft Windows オペレーティング・システムが動作しているクライアント・コンピュータに、Oracle 9iFS FileSync ユーティリティを含む、Oracle 9iFS Windows ユーティリティをインストールする手順について説明します。Oracle 9iFS Windows ユーティリティは、Windows エクスプローラのファイル・システムではできなかったコンテン

ツ管理機能を提供します。Oracle 9iFS FileSync ユーティリティを使用すると、Oracle 9iFS とラップトップなどのローカル・コンピュータ間でファイルの共有や同期化が可能になります。

第7章「トラブルシューティング」

第7章では、インストール時に発生する問題に対処するためのテクニックとヒントについて説明します。

関連マニュアル

詳細は、Oracle Internet File System および Oracle9i データベースのマニュアル・セットに収められている次の各マニュアルを参照してください。マニュアルは、PDF 形式で入手可能です。

- 『Oracle Internet File System リリース・ノート』: Oracle 9iFS のこのリリースに固有の情報が記載されています。
- 『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』: Oracle 9iFS の構成および管理に関する情報が記載されています。
- 『Oracle Internet File System 開発者リファレンス』: Oracle 9iFS Java API に関する説明および Oracle 9iFS を使用してカスタム・アプリケーションを作成する方法が記載されています。
- 『Oracle Text リファレンス』: データベースに完全に統合されたテキスト検索ツールである Oracle Text の構成および使用に関する情報が記載されています。
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』: データベースの管理およびチューニングに関する情報および表領域のサイズ指定に関する情報が記載されています。
- 『Oracle9i ユーザー管理バックアップおよびリカバリ・ガイド』: Oracle9i データベースのバックアップに関する情報が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』: Oracle Enterprise Manager を使用して Oracle9i データベースを管理するための情報が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』: Oracle Enterprise Manager の設定に関する情報が記載されています。
- 『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』: Oracle のクライアントとサーバーとを接続する Oracle Net Services の構成に関する情報が記載されています。
- 『Oracle9i グローバリゼーション・サポート・ガイド』: Oracle のグローバリゼーション・サポートの概要が記載されています。

表記規則

このマニュアルで使用する表記規則は、次のとおりです。

表記規則	説明
固定幅フォント	固定幅フォントは、コマンド、スクリプト名、ディレクトリ名、パス名およびファイル名を示します（たとえば、 <code>root.sh</code> スクリプト）。
大文字	大文字は、パラメータまたは環境変数を示します（たとえば、 <code>ORACLE_HOME</code> ）。
.	コード例における垂直の省略記号は、例に直接関連しない情報が省略されていることを示します。
...	コマンド構文における水平の省略記号は、パラメータの繰返しを示します。次のコマンド例は、コマンドラインに複数の <code>input_file</code> を指定できることを示しています。 <code>command [input_file ...]</code>
<>	コマンド構文における山カッコは、ユーザーが指定する必要がある変数を示します。山カッコは、入力しないでください。次のコマンド例は、ユーザーが変数 <code>input_file</code> の値を入力する必要があることを示しています。 <code>command <input_file></code>
[]	コマンド構文における大カッコは、任意に選択できるオプション句を囲んでいます。大カッコは、入力しないでください。次のコマンド例は、 <code>output_file</code> 変数が任意で入力する項目であることを示しています。 <code>command <input_file> [output_file]</code>
{ }	コマンド構文における中カッコは、縦線（ ）で区切られた、複数の項目で構成される選択項目を囲んでいます。中カッコは、入力しないでください。次のコマンド例は、 <code>a</code> または <code>b</code> のどちらかを選択できることを示しています。 <code>command {a b}</code>
c:\>	Windows NT/2000 のコマンド・プロンプトを表します。 ¹

¹ 実際の例では、特に明記されている場合を除き、それぞれの行の終わりで改行されています。それぞれの入力行の終わりで、必ず [Enter] キーを押してください。

Oracle Internet File System (Oracle 9iFS) をインストール、構成および管理するために、管理者は次のような管理上の基本概念を理解しておく必要があります。

- [Oracle 9iFS ドメイン](#)
- [Oracle 9iFS 管理ツール](#)

Oracle 9iFS ドメイン

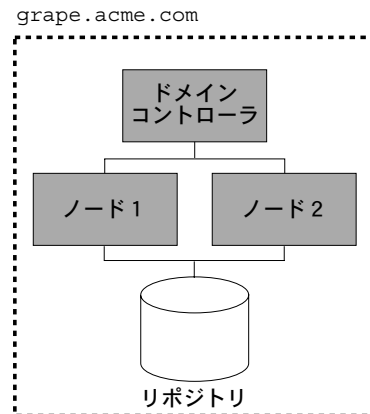
Oracle Internet File System (Oracle 9iFS) の管理上の基本的な単位は、ドメインです。ドメインは、単一の Oracle 9iFS インスタンスです。Oracle 9iFS ドメインは、ノードなど、単一のコンピュータ上で実行されているか、または相互接続された複数のコンピュータ上に配置されている複数の要素によって構成されます。

Oracle 9iFS ドメインの主な要素は次のとおりです。

- **Oracle 9iFS リポジトリ**：Oracle 9iFS によって管理されるすべてのデータは、Oracle 9iFS リポジトリと呼ばれる Oracle9i データベース・スキーマに格納されます。Oracle 9iFS のインストール時に、リポジトリのデータベース・インスタンスおよびスキーマ名を指定します。
- **1 つ以上のノード**：Oracle 9iFS ソフトウェアは、ノードと呼ばれるプロセスのセットとして実行されます。各ノードは特定のコンピュータ、つまりホスト上で実行されます。ドメインのノードは、複数のホスト間で分割することもできますし、単一のホストが 1 つ以上の Oracle 9iFS ノードを持つこともできます。ノードは、Oracle 9iFS リポジトリと同じマシンで実行することもできます。各ノードは、Oracle 9iFS ドメイン内で一意の名前を持ちます。
- **単一のドメイン・コントローラ**：ドメイン・コントローラでは、ドメインを構成するノードを管理します。たとえば、ドメイン・コントローラで、実行中のノードの制御およびノードのステータスの追跡を行ったり、ノードを監視および管理することが可能です。

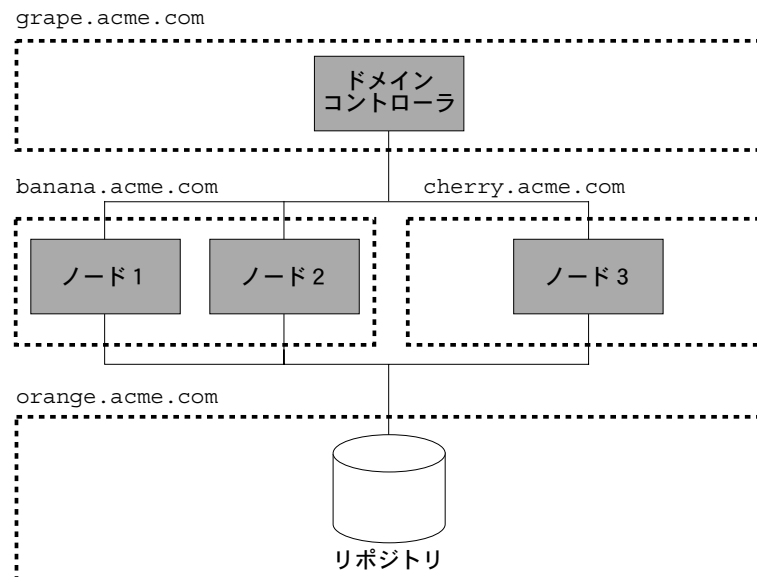
Oracle 9iFS ドメインの論理要素は、リポジトリ、ノードおよびドメイン・コントローラから構成されます。ただし、ドメインの物理構成は、ドメインの論理構成とはまったく異なります。ドメインのある要素は他の要素と同じホストに置く必要があったり、他の要素とは別のホストに置く必要があるといった要件はありません。小規模なインストールでは、リポジトリ、ノードおよびドメイン・コントローラのすべてを単一のホストに置くことがあります（[図 1-1 「単純な Oracle 9iFS ドメイン」](#) を参照）。大規模なインストールでは、要素ごとに異なるホストを使用することも可能です（[図 1-2 「複雑な Oracle 9iFS ドメイン」](#) を参照）。（[図 1-1](#) と [図 1-2](#) では、点線がホストの境界を表しています。）

図 1-1 単純な Oracle 9iFS ドメイン



予定された使用方法および予想される負荷に基づいて Oracle 9iFS ドメインの論理構成および物理構成を決定する作業は、インストール前の処理の手順で行います。ドメインの論理構成および物理構成は、要件の変化に応じて変更できます。

図 1-2 複雑な Oracle 9iFS ドメイン

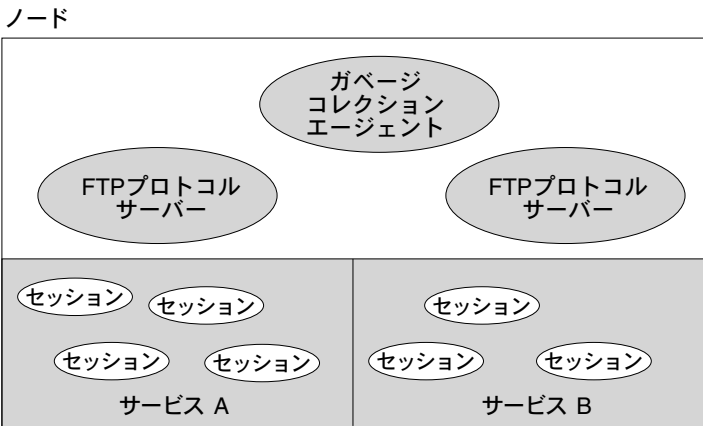


サービスとサーバー

各 Oracle 9iFS ノードは、1 つ以上のサービスおよび 1 つ以上のサーバーを持つことができます（図 1-3「サービスとサーバー」を参照）。

- **サービス**：サービスは、ノード上のユーザー・セッションを管理し、これらのセッションがリポジトリのデータにアクセスできるようにします。通常、各ノードでは単一のサービスが実行されます。ただし、キャッシュのサイズ指定やデフォルト言語などが異なる構成のサービスを提供するなどの目的で、1 つのノードで複数のサービスを実行できます。この場合、同じノード上の各サービス（一般的には同じドメイン内の各サービス）は、同一のリポジトリにバインドする必要があります。サービスは、ノード内で一意の名前を持ちます（ドメイン内で一意である必要はありません）。
- **サーバー**：サーバーは、ノード上で実行されるアプリケーションです。サーバーは、ノードのプロセス内部で、ノードのサービスに対して実行されます。サーバーは、プロトコル・サーバーまたはエージェントのいずれかになります。プロトコル・サーバーは、TCP/IP サーバー・ソケットを開いて、クライアントからの接続を待ち、クライアントの要求に応じてプロトコルの仕様に沿った操作を行います。Oracle 9iFS FTP サーバーは、プロトコル・サーバーの一例です。エージェントは、定期的に、または他のサーバーが非同期に実行したりリポジトリ操作に対応して、事前に指定された操作を自動的に実行します。Oracle 9iFS ガベージ・コレクション・エージェントは、エージェントの一例です。サービスと同様、サーバーはノード内で一意の名前を持ちます（ドメイン内で一意である必要はありません）。

図 1-3 サービスとサーバー



ロケータ

ドメイン・コントローラとノードは、ロケータによって識別されます。ロケータは、ドメイン・コントローラまたはノードを実行しているホストおよびそのポート番号を指定する URL です。

たとえば、図 1-2 「複雑な Oracle 9iFS ドメイン」 では、ドメイン・コントローラのロケータは次のようになります。

```
ifs_socket://grape.acme.com:53140
```

保護ノードと非保護ノード

各ノードには、ノードの監視、エラー条件の検出およびエラーからのリカバリの試行を行う ノード・ガーディアンがあります。非保護ノードの場合、ガーディアンはノードのプロセス内で実行されます。一方、保護ノードの場合、ノード・ガーディアンは別のプロセスで実行されます。保護ノードを使用した場合、ガーディアンは必要に応じてノードのプロセスを終了および再起動するため、よりよい障害リカバリが可能です。

デフォルトでは、ノードは保護されています。

HTTP ノード

Oracle 9iFS では、Oracle HTTP Server powered by Apache で実行される Java サブレットを使用することにより、HTTP および WebDAV プロトコルをサポートしています。このサブレットは、デフォルトでは Oracle HTTP Server powered by Apache の起動時にロードされます。ロードされると、このサブレットによってサブレットの Java VM にノード (HTTP ノード) が作成されます。HTTP ノードには、ユーザー・セッションを管理し、ドメインのリポジトリにアクセスできるようにする Oracle 9iFS サービス、および HTTP と WebDAV プロトコルをサポートするための Oracle 9iFS サーバーがあります。

HTTP ノードのプロセスは Oracle HTTP Server powered by Apache によって所有されるため、HTTP ノードは常に非保護になります。

Oracle 9iFS 管理ツール

Oracle 9iFS には、管理ツール群が提供されています。これらを使用して、リポジトリの管理、Oracle 9iFS ドメインおよびノードの起動と停止、Oracle 9iFS ドメイン内のノードの構成、ユーザーおよびドキュメント・セキュリティの管理、コマンドラインからの作業、Oracle 9iFS スキーマ間でのデータやユーザーのインポートおよびエクスポートを行うことができます。

- [Oracle Enterprise Manager コンソール](#)
- [Oracle 9iFS Manager](#)
- [Oracle 9iFS Configuration Assistant](#)

Oracle Enterprise Manager コンソール

Oracle 9iFS は、エンタープライズ・システムの管理を円滑に行うために、Oracle Enterprise Manager と緊密に統合されています。

- Oracle Enterprise Manager は、Oracle 9iFS ドメインの監視および管理（プロセス管理）に使用されます。図 1-4 「Oracle 9iFS と Oracle Enterprise Manager の統合」に示すように、「Internet File System」は、コンソールを介してアクセスするメイン・フォルダの 1 つとして表示されます。

図 1-4 Oracle 9iFS と Oracle Enterprise Manager の統合



- Oracle Intelligent Agent (IA) は、Oracle 9iFS サービスを検出するために使用されます。また、IA は、ノードおよびドメインを起動するために Oracle 9iFS によって作成されるジョブの制御も行います。Intelligent Agent および Oracle Management Server の起動方法は、第 4 章「インストール後の処理」の「コンピュータおよび Oracle サービスの再起動」で説明しています。
- Oracle Enterprise Manager イベントによって、障害が発生したドメイン・コントローラ・プロセスおよびノード・プロセスが検出され、電子メールの送信またはこれらのプロセスの自動的な再起動を行うジョブを Oracle Enterprise Manager から起動することもできます。（ノード・ガーディアンによって実行される障害検出とは別に実行される

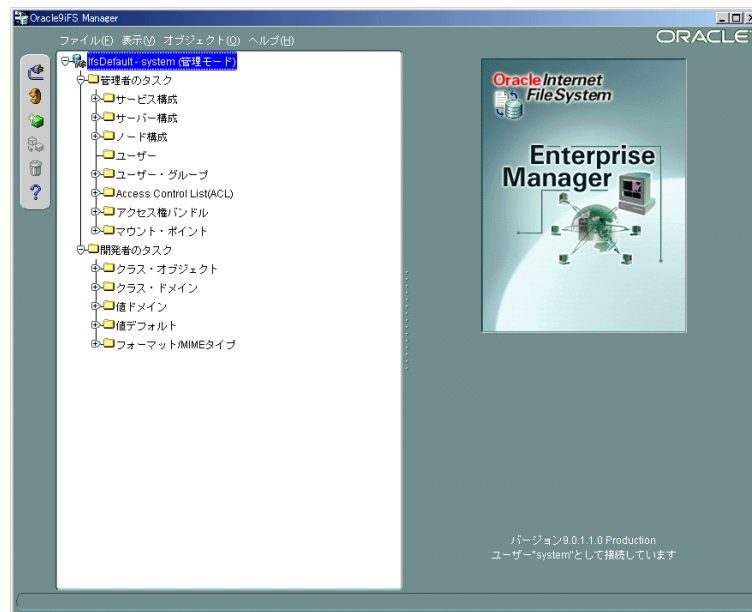
す。) イベントおよび修正ジョブの管理の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle 9iFS Manager

Oracle 9iFS Manager は、Oracle 9iFS の管理インタフェースです。Oracle 9iFS Manager は Oracle Enterprise Manager と統合されており、Oracle Management Server (OMS) との接続モードまたはスタンドアロン・モードで起動できます。

Oracle 9iFS Manager は強力で使いやすいグラフィカルなインタフェースを提供し、その機能は管理タスクと開発タスクに分類されています (図 1-5 「Oracle 9iFS Manager」を参照)。

図 1-5 Oracle 9iFS Manager



Oracle 9iFS Configuration Assistant

Oracle 9iFS Configuration Assistant は、Oracle 9iFS の構成パラメータを指定するためのウィザードであり、インストール時に Oracle Universal Installer によって自動的に起動されます。インストールの詳細は、第 3 章「Oracle 9iFS ソフトウェアのインストール」の「Configuration Assistant の実行」を参照してください。パラメータの変更の詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』の第 4 章「サービス構成およびサーバー構成」を参照してください。

図 1-6 Oracle 9iFS Configuration Assistant



Oracle 9iFS の管理の詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

インストール前の処理

Oracle 9iFS は、Oracle データベースを使用して、ドキュメント、フォルダ、ユーザーおよびその他の Oracle 9iFS リポジトリ・オブジェクトを格納します。Oracle 9iFS をインストールする前に、データベースをインストールし、構成および実行しておく必要があります。

この章では、システムのハードウェア要件とソフトウェア要件、および使用するシステムに必要な Oracle ソフトウェアを適切に準備するための手順について説明します。次の項目について説明します。

- [ハードウェア要件およびソフトウェア要件](#)
- [インストール前の作業](#)

注意： Oracle 9iFS インスタンスのインストール、構成およびメンテナンスには、データベース管理の基本概念および基本手順を理解している必要があります。

ハードウェア要件およびソフトウェア要件

一般に、ハードウェア要件は、次に示す様々な要因によって異なります。

- コンピュータ・システムのハードウェアおよびオペレーティング・システム
- ネットワーク・トポロジおよびネットワークの容量
- ユーザーの合計数
- ユーザーのアクティビティ
- Oracle データベースのサイズ
- サーバー数および同じリソースを共有しているサービス数

ハードウェア要件、ソフトウェア要件、配置オプションはそれぞれ、相互に依存します。配置方針を決めるために、ここで説明する情報を参考にしてください。

ハードウェア要件

表 2-1 に、データベースと Oracle 9iFS を同じマシンに配置するための、各マシンの要件について示します。最小ハードウェア要件は、本番システムではなく開発用プラットフォームのみをサポートします。推奨ハードウェア要件は、約 50 人の指名ユーザーがすべてのプロトコルで適度にアクセスするワークグループをサポートします。

50 人を超える指名ユーザーをサポートする場合は、Oracle 9i データベースと Oracle 9iFS を別々のマシンにインストールすることをお薦めします。詳細は、「[配置オプションおよび必要なソフトウェア・コンポーネント](#)」を参照してください。また、中間層マシンのハードウェア要件については、表 2-2 を参照してください。

表 2-1 ハードウェア要件 — 単一マシン上のデータベースおよび Oracle 9iFS

	最小 ¹	推奨 ²
CPU	Pentium III、500MHz	Pentium III（デュアル）、500MHz
RAM	512MB	1GB
ハード・ディスク領域	5.0GB ³	5.0GB ³
仮想メモリー	786MB	1.5GB

¹ 単一マシン上で、Oracle Enterprise Manager、Oracle データベースおよびすべての Oracle 9iFS プロトコル・サーバーをサポート。約 2 人のユーザーが 2 つのプロトコルで同時にアクセスするという環境をサポート。

² 単一マシン上で、Oracle Enterprise Manager、Oracle データベースおよびすべての Oracle 9iFS プロトコル・サーバーをサポート。約 50 人のユーザーがすべてのプロトコルで適度にアクセスするという環境をサポート。

³ Oracle 9iFS 用に 500MB、データベース用に 4.5GB。

同じマシンで Oracle Enterprise Manager を実行しない場合は、RAM が 512MB 未満であっても、Oracle 9iFS と Oracle9i データベースを単一マシン上で実行できます。この場合、Oracle Enterprise Manager と Oracle 9iFS Manager を管理コンソールとして別々のマシンにインストールする必要があります。第 3 章「Oracle 9iFS ソフトウェアのインストール」を参照し、Oracle 9iFS の管理コンソールを設定するために、インストール方法で「Oracle9iFS 管理構成」を選択してください。

プロトコル・サーバーを起動または停止する方法については、『Oracle Internet File Systems セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

表 2-2 ハードウェア要件 — 中間層マシンの Oracle 9iFS

	最小 ¹	推奨 ²
CPU	Pentium III、500MHz	Pentium III、500MHz
RAM	384MB	512MB
ハード・ディスク領域	500MB	1GB
仮想メモリー	512MB	786MB

¹ Oracle データベースとは別のマシン上で、Oracle 9iFS プロトコル・サーバーをサポート。約 2 人のユーザーが 2 つのプロトコルで同時にアクセスするという環境をサポート。

² Oracle データベースとは別のマシン上で、Oracle 9iFS プロトコル・サーバーをサポート。約 50 人の指名ユーザーがすべてのプロトコルで適度にアクセスするという環境をサポート。

オペレーティング・システム要件

Microsoft Windows プラットフォームでは、次のオペレーティング・システムで Oracle 9iFS がサポートされます。

- Microsoft Windows NT 4.0 (Service Pack6)
- Microsoft Windows 2000 Professional および Server (Service Pack2)

データベース初期化パラメータ要件

表 2-3 に示す初期化パラメータは、Oracle 9iFS のインストールおよびパフォーマンスに影響します。

表 2-3 Oracle9i の初期化パラメータ

パラメータ	最小設定または最小使用可能領域
java_pool_size	30MB
open_cursors	300MB
processes	100
shared_pool_size	50MB (52428800 バイト)

これらの値の確認については、「作業 5: データベース・パラメータの確認」を参照してください。ただし、デフォルトでは、Oracle9i データベースの作成に使用するすべてのテンプレートは、これらの最小要件に適合しているか、またはそれ以上であるため、値を変更する必要はありません。

配置オプションおよび必要なソフトウェア・コンポーネント

Oracle 9iFS は、各マシンで使用可能なリソースに応じて、Oracle データベースと同じマシン、または別のマシンにインストールできます。ただし、Oracle 9iFS は、Oracle9i ホームにインストールする必要があるため、実際の配置は、次の構成に制限されます。

- 1. Oracle9i データベースと Oracle 9iFS の場合
 - a. Oracle 9iFS が、Oracle9i データベースと同じマシンで動作し、かつ Oracle9i ホームが同じ
 - b. Oracle 9iFS が、Oracle9i データベースとは別のマシンで動作している
- 2. Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 と Oracle 9iFS の場合
 - a. Oracle 9iFS が、あるマシンの Oracle9i ホームで動作し、かつ Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 が別のマシンで動作している
 - b. Oracle 9iFS が、Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 と同じマシン上に存在する Oracle9i ホームで動作し、かつ Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 が別の Oracle ホームで動作している

いずれの場合も、Oracle 9iFS をインストールする Oracle ホームは、Oracle9i ホームである必要があります。

Oracle 9iFS をインストールする前にインストールする必要がある Oracle ソフトウェア・コンポーネント、およびそのインストール先は、選択する配置方針によって異なります。

表 2-4 に、Oracle 9iFS に関するすべての Oracle ソフトウェア要件、およびこれらのソフトウェア・コンポーネントをインストールできる、インストール時の選択肢を示します。Oracle 9iFS および Oracle9i データベースを 1 台のマシンにインストールする（前述の 1.a の場合）には、表 2-4 の「Oracle9i データベース・ソフトウェア」の列に示すコンポーネントをインストールします。

Oracle9i データベースとは別のマシンに Oracle 9iFS をインストールするには、表 2-4 の「Oracle9i クライアント・ソフトウェア」の両方の列（管理者タイプおよびカスタム・タイプ）のコンポーネントをインストールして、Oracle9i ホームを作成する必要があります。

表 2-4 必要な Oracle ソフトウェア・コンポーネントと Oracle Universal Installer でのオプション

ソフトウェア・コンポーネント	Oracle9i データベース・ソフトウェア	Oracle9i クライアント・ソフトウェア	
		管理者タイプ	カスタム・タイプ
Oracle9i データベース リリース 1 (9.0.1 以上) : Enterprise Edition または Standard Edition	あり	なし	なし
Oracle JVM	あり。必須	なし	なし
Oracle Partitioning ¹	Enterprise Edition のみ。オプション (ただし推奨)	なし	なし
Oracle Text ²	あり。オプション (ただし推奨)	なし	なし
Oracle Enterprise Manager Client	あり	あり	なし
Oracle Management Server	あり	なし	なし
Oracle Intelligent Agent	あり	あり	なし
Oracle JDBC/OCI Driver for Java 1.1 および 1.2	あり	あり	なし
Oracle HTTP Server	あり	なし	あり
SQL*Plus	あり	あり	なし

¹ Oracle Partitioning は、Enterprise Edition のみで使用可能です。Oracle Partitioning は必須ではありませんが、より高速なパフォーマンスのためにインストールすることをお勧めします。

² Oracle Text は、Oracle 9iFS リポジトリのコンテンツ上で検索機能を使用するために必要です。

表の「あり」は、列のヘッダーに示されているオプションを選択すると、必要なコンポーネントがインストールされることを示します。表の「なし」は、列のヘッダーに示されているオプションでは、必要なコンポーネントをインストールするオプションがないことを示します。つまり、1 台のマシンにすべてをインストールする場合は、**Oracle9i データベース・ソフトウェア**の列に示されているソフトウェア・コンポーネントをインストールする必要があります。これらのコンポーネントは、すべて **Oracle9i データベースの製品 CD** からインストール可能です。

2 台の別のマシンにインストールする場合は、**Oracle9i データベース・ソフトウェア**の列に示されているソフトウェアを 1 台のマシンにインストールし、**Oracle9i クライアント・ソフトウェア**の下の方の列に示されているソフトウェア・コンポーネントを 2 台目のマシンにインストールする必要があります。手順の詳細は、この章の後半にある「[作業 4: Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースのインストール（またはこれらリリースへのアップグレード）](#)」および「[作業 8: 中間層マシンまたは Oracle9i ホームの準備](#)」を参照してください。

インストール前の作業

Oracle 9iFS のインストールの準備として、この項に記載されているインストール前の作業を実行します。使用している環境によっては、これらの作業の一部のみ必要な場合があります。たとえば、新しく **Oracle9i データベース**をインストールし、「**General Purpose**」または「**Transaction Processing**」データベース・テンプレートを使用してデータベースを作成する場合、データベース・パラメータの確認（作業 5）や、**Oracle JVM** がインストールされているかの確認（作業 6）は必要ありません。

これらの手順は、データベースおよび **Oracle 9iFS** が、いずれも **Windows NT** マシンまたは **Windows 2000** マシンにインストールされることを前提としています。データベースを **UNIX** マシンにインストールする場合、次に示す作業について不明な点は、使用しているプラットフォーム用のインストール・ガイドを参照してください。

- ❑ 作業 1: 必要なアカウント、パスワードおよびサービス情報の収集
- ❑ 作業 2: ハードウェア要件およびソフトウェア要件の検証
- ❑ 作業 3: 既存のデータベースおよびログ・ファイルのバックアップ
- ❑ 作業 4: [Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースのインストール（またはこれらリリースへのアップグレード）](#)
- ❑ 作業 5: データベース・パラメータの確認
- ❑ 作業 6: **Oracle JVM** がデータベースにインストールされているかの確認
- ❑ 作業 7: ネット・サービス名およびリスナーの構成
- ❑ 作業 8: [中間層マシンまたは Oracle9i ホームの準備](#)
- ❑ 作業 9: **Oracle 9iFS** のインストールに必要なプロセスの起動

作業 1: 必要なアカウント、パスワードおよびサービス情報の収集

Oracle 9iFS をインストールするには、Windows NT マシンまたは Windows 2000 マシンに Administrator グループのメンバー（たとえば、Administrator）でログインします。必要に応じて、Windows NT/2000 のシステム管理者からアカウント情報を入手してください。

既存の Oracle データベースまたは Oracle Enterprise Manager インフラストラクチャがインストールされ稼働している環境にインストールする場合、次に示す複数のログイン・アカウントおよびパスワードを知っている必要があります。

- SYSDBA でログインする権限を持つ Oracle 管理者アカウントおよびパスワード
- Oracle Enterprise Manager スキーマ名およびパスワード
- Oracle データベースのローカル・サービス名

この情報は、Oracle データベース管理者から必要に応じて入手してください。

作業 2: ハードウェア要件およびソフトウェア要件の検証

ハードウェア・リソースを見積もり、配置方法（単一マシンまたは複数マシン、単一 Oracle ホームまたは複数 Oracle ホーム）を選択します。マシンが配置計画の内容に対応した「[ハードウェア要件およびソフトウェア要件](#)」のすべての要件に適合していることを確認します。

作業 3: 既存のデータベースおよびログ・ファイルのバックアップ

Oracle 9iFS を既存のデータベースにインストールする前、または Oracle8i データベース リリース 8.1.7.0 を Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースにアップグレードする前に、発生する可能性のあるすべてのエラーからリカバリできるように、データベースを確実に停止し、全体バックアップを実行する必要があります。また、次のディレクトリに格納されているインストール・ログ・ファイルをバックアップします。

```
<drive>:\Program Files\Oracle\Inventory\logs
```

SHUTDOWN IMMEDIATE または SHUTDOWN ABORT を使用してユーザーをシステムからログオフさせる場合、制限モードでデータベースを再起動した後、バックアップを実行する前に、通常優先度でデータベースを停止してください。

詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』または『Oracle9i ユーザー管理バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。

作業 4: Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースのインストール（またはこれらリリースへのアップグレード）

Oracle 9iFS スキーマは、Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 以上または Oracle9i データベース リリース 1 (9.0.1) に格納できます。Oracle 9iFS 用のデータベースのインストールおよび構成時は、次のことをお勧めします。

- 最適なパフォーマンスのために、Oracle Partitioning をインストールします。データベースの Enterprise Edition のみで使用可能である Oracle Partitioning を使用すると、大きな表を小さく分割し、アプリケーション・レベルの単一のデータ・ビューを維持しながら、分割されたそれぞれを個々に管理できます。大規模な Oracle 9iFS リポジトリでは、Oracle Partitioning によってパフォーマンスを向上できます。
- (Database Configuration Assistant で)、「General Purpose」または「Transaction Processing」のいずれかのデータベース・テンプレートを選択します。この場合、初期化パラメータおよびその他のデータベース・サイズ・パラメータを、すべての要件に適合させるかまたはそれ以上にします。
- Oracle 9iFS をマルチ言語環境で使用できるようにするために、データベース・キャラクタ・セットとして UTF8 を使用します。別のデータベース・キャラクタ・セットを指定すると、機能が制限される可能性があります。たとえば、すべての言語でのドキュメントの検索、またはすべての言語での Web インタフェースの表示ができなくなります。Oracle9i データベースに対してどのキャラクタ・セットを選択するかによって、Oracle 9iFS のインストール時に使用可能な選択肢が決まります。詳細は、3-14 ページの「[ドキュメントの内容](#) ページ」を参照してください。
- Oracle 9iFS に格納する様々な種類のコンテンツの表領域を（なるべく別のディスクに）作成します。デフォルトの Oracle 9iFS インストールでは、すべてのコンテンツは USERS 表領域に格納されます。Oracle 9iFS の構成プロセスで、コンテンツの種類（索引付けされていないメディア、索引付けされたメディア、Oracle Text データなど）ごとに表領域を作成できます。表領域は、Oracle 9iFS を構成する前に作成する必要があります。パフォーマンスを最適化するため、各表領域は別々のハードディスク・ドライブ上に作成することをお勧めします。

通常の Oracle9i データベースのインストールでは、リスナーがインストールされ、起動され、さらに自動的に起動するように構成されます。デフォルトのローカル・ネーム・サービス（Oracle Net Service で指定する名前）が自動的に構成され、データベースが作成されます。その後、Oracle Intelligent Agent がインストールされて起動します。ここまで作業した後、同じマシンに Oracle 9iFS をインストールする場合は、2-10 ページの「[作業 8: 中間層マシンまたは Oracle9i ホームの準備](#)」までスキップしてください。

データベースがすでにインストールされている場合、「[作業 5: データベース・パラメータの確認](#)」、「[作業 6: Oracle JVM がデータベースにインストールされているかの確認](#)」および「[作業 7: ネット・サービス名およびリスナーの構成](#)」に示された、構成に関するいくつかの設定を確認する必要があります。

Oracle9i データベースのインストールの詳細は、使用しているプラットフォーム用のインストール・ガイドを参照してください。

作業 5: データベース・パラメータの確認

データベースが作成された方法（使用されたテンプレート）がわからない場合や、そのためにデータベース初期化パラメータの設定に確信が持てない場合、「[データベース初期化パラメータ要件](#)」に示されているパラメータの値を確認し、必要に応じて変更することができません。

パラメータ値を確認するには、SQL*Plus を使用してデータベースに接続し、次のように v\$parameter 表に対して問合せを実行します。

```
c:¥>%ORACLE_HOME%¥bin¥sqlplus /nolog
SQL> connect system/<sys_password> as sysdba
接続されました。
SQL> SELECT name, value FROM v$parameter WHERE name = 'processes';
```

processes パラメータの値が表示されます。前述のコマンドを繰り返し、'processes' を適切なパラメータ名に置き換えて、[表 2-3 「Oracle9i の初期化パラメータ」](#) に示されている他のパラメータ値を確認します。パラメータを変更する必要はありませんが、変更する場合は、初期化パラメータ設定の管理方法が Oracle9i データベースと Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 以前では異なることに注意してください。設定を変更する前に、それぞれのリリースに固有の手順について、データベース管理マニュアルを参照してください。

作業 6: Oracle JVM がデータベースにインストールされているかの確認

Oracle JVM がインストールされずにデータベースで実行されている場合、Oracle 9iFS の構成は失敗します。Oracle JVM が存在することを簡単に確認するには、SQL*Plus を使用してデータベース・インスタンスに接続し、（「[作業 5: データベース・パラメータの確認](#)」に示すとおり）次の問合せを実行します。

```
SQL> select count(*) from all_objects where object_name = 'DBMS_JAVA';
```

この問合せによって、次に示すとおり 3 が戻されます。3 が戻されない場合は、JVM がインストールされていないため、Oracle 9iFS の構成は失敗します。

```
      COUNT(*)
-----
          3
```

このオプションを使用してデータベースを正しくインストールする方法の詳細は、使用しているプラットフォーム用の Oracle9i データベースのインストレーション・ガイドを参照してください。

作業 7: ネット・サービス名およびリスナーの構成

Oracle 9iFS を構成する前に、Oracle ネットワーキング・インフラストラクチャのコンポーネントが正しく設定され、実行されている必要があります。具体的には、次の要件があります。

- リスナーがデータベース上で実行されている必要があります。
- Oracle 9iFS をインストールするすべてのマシン上で、ローカル・ネット・サービスが構成されている必要があります。ローカル・サービス名は、Oracle データベースを参照します。この名前は、Oracle 9iFS の構成時、データベースに対する TNS サービス名として入力します。

注意： 中間層マシン上でローカル・ネット・サービス名を構成する場合、Oracle 9iFS スキーマの作成に使用する名前と同じローカル・ネット・サービス名を使用してください。

これらのコンポーネントは、通常、Oracle データベースおよび Oracle クライアント・ソフトウェアのインストール中にインストールおよび構成されるため、実際にこの作業を行う必要はありません。Oracle データベースおよび Oracle 9iFS を同じマシン上にインストールする場合も、リスナーおよびネット・サービスが両方とも構成され、実行されている必要があります。

必要に応じて、Windows NT または Windows 2000 の「スタート」->「プログラム」->「Oracle - <Oracle_Home>」->「Configuration and Migration Tools」メニューから使用可能な Net Configuration Assistant または Net Manager を使用して、これらのコンポーネントを構成します。

または、tnsnames.ora ファイルを手動で編集することも可能です（使用する環境で Oracle Names サービスを実行している場合）。TNS サービス名の構成の詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

作業 8: 中間層マシンまたは Oracle9i ホームの準備

データベースとは別のマシン（または別の Oracle ホーム）に Oracle 9iFS をインストールする場合、必要な Oracle9i クライアント・ソフトウェアをインストールおよび構成する必要があります。Oracle 9iFS を、Oracle9i データベースと同じマシンの同じ Oracle ホームにインストールする場合は、この作業を省略できます。

Oracle 9iFS をインストールするマシンで、次の手順を実行します。

1. Oracle Universal Installer を使用して、Oracle9i クライアントの「管理者」タイプをインストールします。クライアント・インストール時に、中間層マシン上にローカル・ネット・サービス名を構成する場合は、Oracle 9iFS スキーマの作成時と同じローカル・ネット・サービス名を使用してください。

クライアント・インストールの最後に、Oracle Universal Installer の画面で、次の手順を実行します。

2. 「次のインストール」ボタンをクリックし、Oracle Universal Installer のインストール可能なソフトウェアのリストに戻ります。
3. 「カスタム」タイプのインストールを選択し、「Oracle HTTP Server」を選択します。

Oracle9i クライアント・ソフトウェア・コンポーネントのインストールの詳細は、『Oracle9i インストール・ガイド』および『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

作業 9: Oracle 9iFS のインストールに必要なプロセスの起動

Oracle 9iFS をインストールする前に、データベース・マシン上で、データベースおよびリスナーが実行されている必要があります。新規にインストールしたデータベース・インスタンスの場合、これらの両方のサービスは、通常、インストール・プロセスの最後に起動されますが、次の手順で確認できます。

- Windows NT の場合、「コントロールパネル」で「サービス」を開きます。
- Windows 2000 の場合、「コントロールパネル」の「管理ツール」を開き、「サービス」を開きます。

いずれの場合も「サービス」のリストをスクロールし、次の項目を検索します。

- Oracle<Oracle_Home>TNSListener
- OracleService<SID>

これらのサービスがいずれも起動していない場合（項目名の横の「状態」フィールドに「停止」が表示されているか、または空白の場合）、「開始」ボタンをクリックします。（これらのサービスは、自動的に開始するように設定する方が望ましいため、手動で開始するように設定されている場合は、「自動」に変更する必要があります）。詳細は、4-2 ページの「[コンピュータおよび Oracle サービスの再起動](#)」の表 4-1 を参照してください。これで、Oracle 9iFS のインストールを開始できます。

Oracle 9iFS ソフトウェアのインストール

Oracle 9iFS のインストーラには、製品の完全なインストールおよび Oracle 9iFS ドメインの管理に必要なコンポーネントのみのインストールという、2 つのオプションがあります。いずれの場合も、この章で説明するとおり、Oracle Universal Installer からプロセスが起動されます。次の項目について説明します。

- [Oracle Universal Installer の実行](#)
- [Configuration Assistant の実行](#)

Oracle Universal Installer の実行

Oracle 9iFS をインストールおよび構成する前に、リソースの競合を回避するため、必要のないアプリケーションをすべて終了してください。製品のインストールに使用するアカウントには、Windows NT/2000 の管理者権限が必要です。たとえば、Administrator というユーザー・アカウントまたは Administrator グループに存在する別のユーザー・アカウントでログインする必要があります。Oracle 9iFS ソフトウェアは、「Oracle Internet File System Release 9.0.1 for Microsoft Windows NT/2000」の CD-ROM に含まれています。

1. CD-ROM 内の次のパスから Oracle Universal Installer を起動します。

```
<CD-ROM>\install\win32\setup.exe
```

2. 「ようこそ」 ページで、「次へ」をクリックします。
3. 「ファイルの場所」 ページの「ソース ...」 フィールドで、products.jar ファイルの場所をそのまま受け入れるか、または製品 CD-ROM から選択します。「インストール先 ...」 フィールドで、Oracle 9iFS ソフトウェアをインストールするディレクトリのフルパスを入力または選択します。Oracle 9iFS は、必ずアクティブな Oracle9i ホームにインストールする必要があります。インストールされた Oracle 9iFS ソフトウェアは、削除して再インストールしないかぎり移動できないため、インストール先は慎重に選択してください。
4. 「次へ」をクリックします。
5. 「サマリー」 ページで「インストール」をクリックすると、インストールが開始されます。インストールの進捗状況がプログレス・バーに表示されます。

Configuration Assistant の実行

インストールが完了すると、Oracle Universal Installer によって Oracle 9iFS Configuration Assistant が自動的に起動されます。

図 3-1 Oracle 9iFS Configuration Assistant



Oracle 9iFS Configuration Assistant は、Oracle 9iFS の構成パラメータを指定するためのウィザードです。必要な選択を行い、「次へ」ボタンをクリックして次の画面に進みます。

「取消」ボタンをクリックすると構成が中止されますが、後でも実行できます。後で Oracle 9iFS を構成する場合、または Oracle 9iFS を再構成する場合は、次のディレクトリに格納されている ifsconfig バッチ・ファイル (ifsconfig.bat) を実行します。

```
%ORACLE_HOME%\9iifs\bin
```

Oracle 9iFS Configuration Assistant の処理を監視するには、次のファイルに書き込まれたログを参照します。

```
%ORACLE_HOME%\9iifs\log\IfsConfigOut.log
```

1. 「ようこそ」ページで、「次へ」ボタンをクリックして構成プロセスを開始します。
2. 「Oracle データベースの選択」ページで、このホストの構成タイプとして「Oracle9iFS 完全構成」または「Oracle9iFS 管理構成」のいずれかを選択します。

図 3-2 「Oracle データベースの選択」 ページ



- このマシンに、Oracle 9iFS サーバーをインストールおよび構成するには、「Oracle9iFS 完全構成」を選択する必要があります。この構成を選択すると、Oracle 9iFS ドメインを任意に管理できるソフトウェアが提供されます。
- Oracle 9iFS ドメインの管理にこのホストを使用する場合に必要なコンポーネントのみをインストールするには、「Oracle9iFS 管理構成」を選択します。「次へ」ボタンをクリックした後、手順 15 に進んでください。

注意： Oracle 9iFS をインストールするには、Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 以上、または Oracle9i データベース リリース 1 (9.0.1) のデータベースを実行している必要があります。

3. 「Oracle9iFS 完全構成」を選択した場合は、データベースを Oracle 9iFS と同じマシンにインストールしたかどうかに関係なく、Oracle 9iFS で使用するデータベースに対する TNS サービス名を入力します。後で、追加の中間層マシンをインストールする場合は、ここで入力した名前と同じサービス名を使用する必要があります。

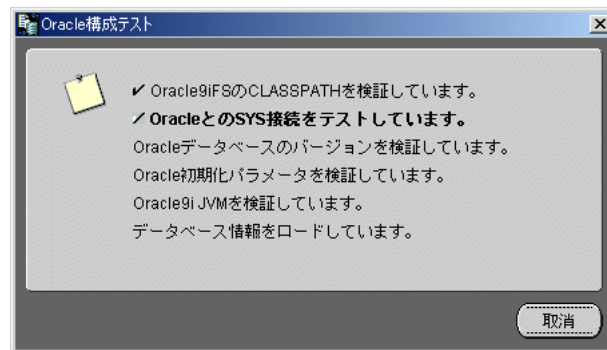
次の情報を入力します。

表 3-1 Oracle データベースのログイン・パラメータ

パラメータ	説明
TNS サービス名	Oracle 9iFS で使用するデータベース・サーバーを識別するために使用します。ローカル・ネット・サービス構成の詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。
SYS パスワード	SYS データベース・ユーザーのパスワード。デフォルトは、change_on_install です。

4. 「次へ」 ボタンをクリックして、データベース接続を検証します。次の図のとおり、ダイアログ・ボックスに検証の進行状況が示されます。

図 3-3 「Oracle 構成テスト」ダイアログ・ボックス



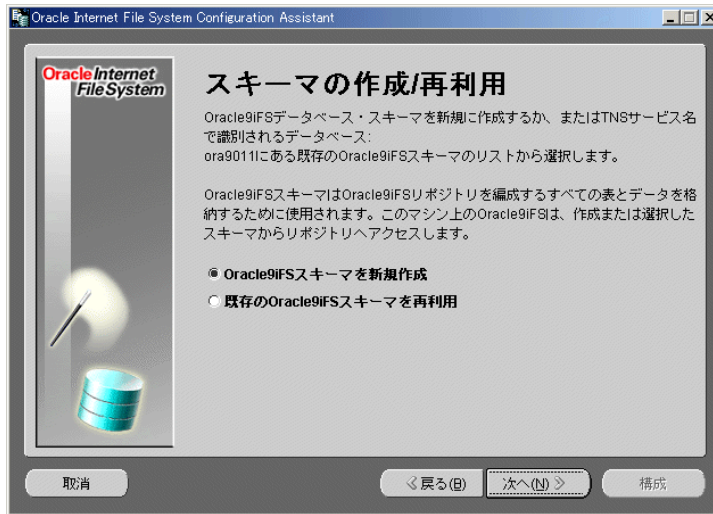
エラーが発生した場合、問題を修正しなければ処理を続行できません。たとえば、Oracle JVM がデータベースにインストールされていない場合、DBMS_JAVA パッケージに関連するエラー・メッセージが表示されます。詳細は、2-9 ページの「[作業 6: Oracle JVM がデータベースにインストールされているかの確認](#)」を参照してください。

5. データベースに Oracle Internet File System スキーマが存在しない場合、「新規ポジトリの作成」ページが表示されます。その場合は、手順 7 に進んでください。

または

データベースに少なくとも 1 つの Oracle Internet File System スキーマが存在する場合は、「スキーマの作成 / 再利用」ページが表示されます。

図 3-4 「スキーマの作成 / 再利用」 ページ



「Oracle9iFS スキーマを新規作成」または「既存の Oracle9iFS スキーマを再利用」を選択します。

- 使用している環境への Oracle 9iFS のインストールが 2 回目で、かつ新規のリポジトリを作成する場合は、「Oracle9iFS スキーマを新規作成」を選択します。
「Oracle9iFS スキーマを新規作成」オプションでは、Oracle Internet File System 用に新規のリポジトリを作成します。このオプションでは、後続の「プロトコル・サーバー・オプション」ページで、実行するプロトコル・サーバーを選択し、そのサーバーを実行するポートを割り当てることができます。
- 既存の Oracle 9iFS ドメインに中間層マシンを追加する場合は、「既存の Oracle9iFS スキーマを再利用」を選択します。

Oracle 9iFS ドメイン内の Oracle 9iFS 中間層サーバーを構成するすべてのサーバーで、Oracle 9iFS Configuration Assistant を実行する必要があります。Oracle 9iFS に関する情報は、リポジトリにある単一のサーバー構成オブジェクトに格納されます。「既存の Oracle9iFS スキーマを再利用」オプションを選択すると、すべての Oracle 9iFS 中間層サーバーは同じ構成を使用します。

6. 新規の Oracle 9iFS スキーマを作成するか、または既存のスキーマを再利用するかを選択し、「次へ」ボタンをクリックします。
 - 新規の Oracle 9iFS スキーマの作成を選択した場合は、「新規リポジトリの作成」ページが表示されます。

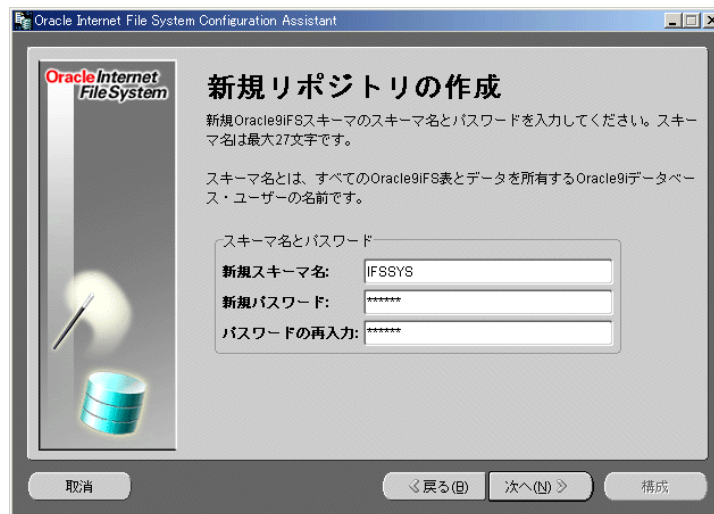
手順 7 に進みます。

- 既存のスキーマの再利用を選択した場合は、「Oracle9iFS スキーマの選択」ページが表示されます。

手順 13 に進みます。

7. (新規スキーマの設定、続き) 「新規リポジトリの作成」ページで、新しいスキーマの名前（デフォルトは、ifssys）およびパスワードを入力します（確認のため、パスワードの再入力を要求されます）。

図 3-5 「新規リポジトリの作成」ページ



既存のスキーマと同じ名前で新規のスキーマを作成しようとした場合、警告メッセージが表示されます。

警告： 既存のスキーマと同じ名前で新規のスキーマを作成すると、Oracle 9iFS のセキュリティ・スキーマ (<schemaname>\$CM) のみでなく、既存のスキーマとそのすべての内容が削除されます。この場合、元に戻すことはできません。

8. 「Oracle9iFS オプションの設定」ページで、「すべての Oracle9iFS 記憶域に "USERS" 表領域を使用」を選択してデフォルトの表領域設定を使用するか、または「カスタム表領域を選択」を選択して独自の表領域を指定します。「カスタム表領域を選択」オプションを選択する場合は、必要な表領域がすでに作成されていることを確認してください。Oracle 9iFS Configuration Assistant では、表領域は作成できません。詳細は、「作業 4: Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースのインストール (またはこれらリリースへのアップグレード)」を参照してください。

図 3-6 「Oracle9iFS オプションの設定」ページ



- Oracle 9iFS のカスタム表領域を作成していない場合は、デフォルト（"USERS" 表領域を使用）を選択して「次へ」をクリックします。手順 11 に進みます。
- 独自の表領域を作成済の場合は、「カスタム表領域を選択」を選択して「次へ」をクリックします。手順 9 に進みます。

注意：「Oracle9iFS オプションの設定」ページで「次へ」をクリックすると、Configuration Assistant によって Oracle Text の確認が行われます。

9. 「Oracle9iFS 表領域」ページで、使用する表領域をドロップダウン・リストから選択します。

図 3-7 「Oracle9iFS 表領域」 ページ



パフォーマンスを最大限に向上させるため、これらの表領域をそれぞれ別のディスクに格納することをお薦めします。

表 3-2 表領域の説明

表領域	説明
プライマリ	ドキュメントのメタデータ、ユーザーやグループに関する情報およびその他の Oracle 9iFS オブジェクト・データを格納します。
索引付けされていないメディア	.zip ファイルなど、Oracle Text によって索引付けされていないドキュメントの LOB データを格納します。
索引付けされたメディア	テキスト・ファイルやワード・プロセッシング・ファイルなど、Oracle Text によって索引付けされたドキュメントの LOB データを格納します。
interMedia メディア	イメージ、オーディオおよびビデオのファイルなど、Oracle interMedia によって索引付けされたドキュメントの LOB データを格納します。
Oracle Text 索引	Oracle9i データベース・データの Oracle 索引を格納します。
Oracle Text キー・マップ	Oracle Text 情報と Oracle 9iFS 情報のマッピングを格納します。

表 3-2 表領域の説明

表領域	説明
Oracle Text データ	Oracle 9iFS ドキュメントに関する Oracle Text データ（どのドキュメントにどの単語が出現するか）を格納します。

10. 「次へ」をクリックします。「Oracle9iFS プロセス」ページが表示されます。
11. 「Oracle9iFS プロセス」ページで、ローカル・マシンで実行するコンポーネントおよび選択したプロセスがリスニングを行うポートを指定します。

図 3-8 「Oracle9iFS プロセス」ページ



注意： 手順 6 で「Oracle9iFS スキーマを新規作成」を選択して新規にスキーマを作成する場合、このページでは「ドメイン・コントローラ」オプションを必ず選択してください。選択しなかった場合は、次の手順で「プロトコル・サーバー・オプション」ページが表示されません。

表 3-3 Oracle 9iFS プロセスの説明

プロセス	説明
ローカル・ホスト名	Oracle 9iFS が構成されるマシンのホスト名。使用するコンピュータに複数のネットワーク・インタフェースがある場合（2つのイーサネット・カードがそれぞれ別のネットワークに接続している場合など）は、このホスト名を変更することで対応できます。
ドメイン・コントローラ	このマシンで Oracle 9iFS ドメイン・コントローラを実行するように構成します。各ドメインで、1つのドメイン・コントローラのみが実行可能です。
ノード	このマシンで Oracle 9iFS ノード（エージェントまたはプロトコル・サーバー、あるいはその両方）を実行するように構成します。
Oracle9iFS システム・エージェント	このマシンですべての Oracle 9iFS システム・エージェントを実行するように構成します。エージェントは、ドメイン内で1つのノードのみで実行してください。
Oracle9iFS プロトコル・サーバー	このマシンで Oracle 9iFS プロトコル・サーバーを実行するように構成します。「ドメイン・コントローラの実行」を選択した場合、このドメインのすべてのプロトコル・サーバーのポートを入力するための「プロトコル・サーバー・オプション」ページが次に表示されます。「ドメイン・コントローラの実行」を選択しなかった場合、最初に設定したオプションが再利用されるため、「プロトコル・サーバー・オプション」ページは表示されません。
HTTP ノード	HTTP および WebDAV アクセスのための Oracle 9iFS DAV サーバーをこのマシンで実行するようにノードを構成します。

「Oracle9iFS プロトコル・サーバー」を選択すると、「プロトコル・サーバー・オプション」ページが表示されます。

図 3-9 「プロトコル・サーバー・オプション」 ページ



デフォルトで表示されるポート番号を使用することも、これらを変更することもできます。NFS プロトコル・サーバーのメイン・ポートを変更する場合は、マウント・サーバー・ポイントも変更する必要があります。

注意： デフォルトでは、ここで割り当てたポート番号は、ドメイン内のすべてのノード上のすべてのプロトコル・サーバーに対して適用されます。手順 6 で「既存の Oracle9iFS スキーマを再利用」を選択した場合、「プロトコル・サーバー・オプション」ページは表示されません。

12. Oracle 9iFS のプロセスおよびプロトコル・サーバーのオプションを指定し、「次へ」をクリックします。
「ドキュメントの内容」ページが表示されます。手順 14 に進みます。
13. (既存のスキーマまたは管理構成の再利用、続き) 「Oracle9iFS スキーマの選択」ページで、使用するスキーマを選択し、そのパスワードを入力します。続いて、「次へ」をクリックします。

図 3-10 「Oracle9iFS スキーマの選択」 ページ



14. 「ドキュメントの内容」 ページで、Oracle 9iFS にドキュメントを格納する際に使用するデフォルトのキャラクタ・セットおよび索引付けする言語を選択します。続いて、「次へ」をクリックします。

表示されるデフォルト値は、データベースのデフォルト設定に基づいています。これらのデフォルト値は、Oracle 9iFS に転送されるドキュメントの言語またはキャラクタ・セットをユーザーが指定しない場合に使用されます。FTP や WebDAV などの非 Unicode 対応プロトコルでも、これらのプロトコル・サーバーが使用するキャラクタ・セットを判断するために、このデフォルトのキャラクタ・セットが使用されます。

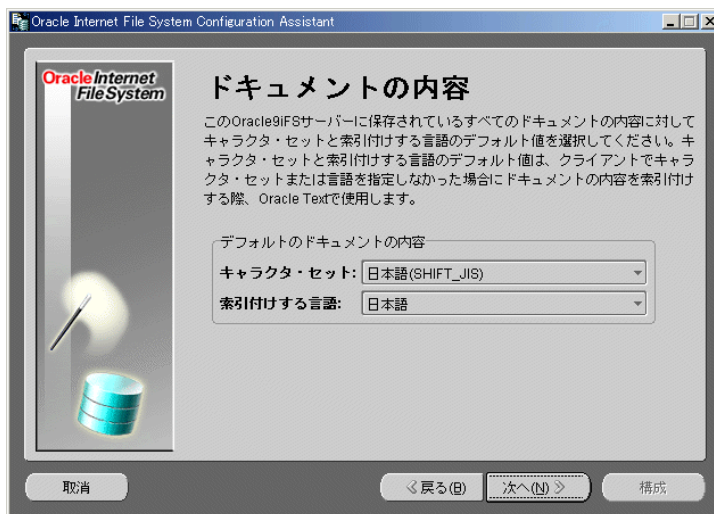
Oracle 9iFS をマルチ言語環境で使用する場合、ドキュメントのキャラクタ・セットとして UTF8 を使用することをお勧めします。別のドキュメント・キャラクタ・セットを指定すると、機能が制限される可能性があります。たとえば、すべての言語でのドキュメントの内容の検索、またはすべての言語での Web インタフェースの表示ができなくなります。

日本語の単一言語機能のみが必要な場合は、UTF8、JA16SJIS または JA16EUC のドキュメント・キャラクタ・セットを使用してください。韓国語の単一言語機能が必要な場合は、UTF8 または KO16KSC5601 を使用します。中国語の単一言語機能が必要な場合は、UTF8、ZHS16CGB231280、ZHS16GBK、ZHT32EUC、ZHT16BIG5、ZHT32TRIS または AL24UTFSS を使用します。

シングルバイトの言語機能のみが必要な場合は、UTF8 または Oracle9i データベースでサポートされているシングルバイトのキャラクタ・セットを使用します。

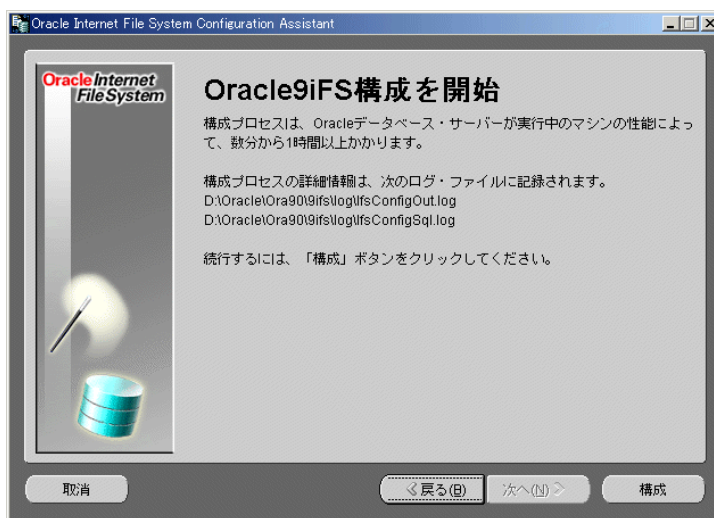
詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「MULTI_LEXER」の項を参照してください。

図 3-11 「ドキュメントの内容」 ページ



15. 「Oracle9iFS 構成を開始」 ページで、「構成」 ボタンをクリックして Oracle 9iFS の構成プロセスを開始します。

図 3-12 「Oracle9iFS 構成を開始」 ページ

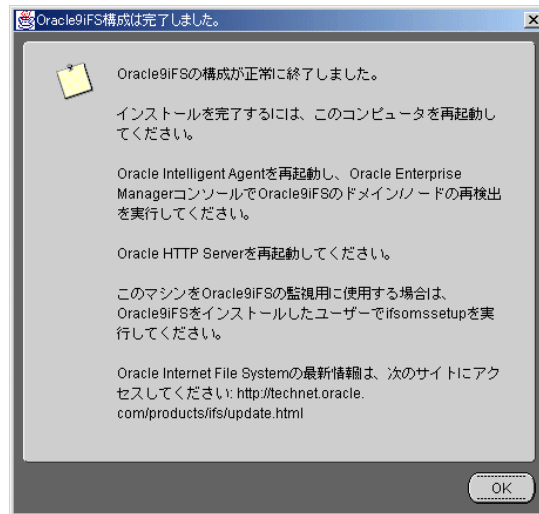


構成プロセスを開始すると、進捗状況を表すウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合は、次のログ・ファイルで詳細を確認してください。

```
%ORACLE_HOME%\9ifs\log\IfsConfigOut.log
```

構成が正常に完了したこと、およびインストール後の処理として必要な手順を示すダイアログ・ボックスが表示されます。

図 3-13 「Oracle9iFS 構成は完了しました。」 ダイアログ・ボックス



ダイアログ・ボックスに表示されている手順に関する情報は、第 4 章「インストール後の処理」の「構成完了後に必要な作業」を参照してください。

16. 「OK」をクリックします。
17. 「インストールの終了」ページで「終了」ボタンをクリックすると、Oracle Universal Installer が終了します。終了を確認するメッセージが表示されたら「はい」をクリックします。

注意： %ORACLE_HOME%\9ifs\bin ディレクトリにある ifssetup バッチ・ファイルは、構成の最後に自動的に実行されます。

インストール後の処理

この章では、Oracle 9iFS のインストール後に必要な処理の手順を説明します。次の項目について説明します。

- 構成完了後に必要な作業
- インストール後のオプションの作業

また、第 5 章「[Oracle Enterprise Manager の使用](#)」に記載されている作業を行い、Oracle 9iFS の管理について習熟することをお勧めします。

構成完了後に必要な作業

第 3 章の図 3-13 「Oracle9iFS 構成は完了しました。」ダイアログ・ボックス」に示すとおり、Oracle 9iFS Configuration Assistant による処理が正常に完了すると、Oracle 9iFS が使用可能になる前に実行する必要があるいくつかの追加作業のリストが、「Oracle9iFS 構成は完了しました。」ウィンドウに表示されます。この項では、これらの作業および Oracle 9iFS を起動して実行するために必要な他の関連作業について説明します。

注意： Oracle データベースとは別のマシンに Oracle 9iFS を配置した場合、1 台のマシンでのみ実行する必要がある作業と、すべてのマシンで実行する必要がある作業があることに注意してください。

コンピュータおよび Oracle サービスの再起動

Oracle 9iFS Configuration Assistant の完了後、コンピュータを再起動していない場合は、再起動します。マシンが再起動されたら、次に示す手順を実行し、Oracle サービスも再起動されたことを確認します。これらのサービスは、Windows NT または Windows 2000 の「コントロール パネル」で確認できます。サービス名には、Oracle ホーム名が含まれています。「コントロール パネル」の「サービス」にアクセスする手順は次のとおりです。

- Windows NT の場合：「コントロール パネル」の「サービス」を開きます（「スタート」->「設定」->「コントロール パネル」->「サービス」）。
 - Windows 2000 の場合：「コントロール パネル」の「管理ツール」を開きます（「スタート」->「設定」->「コントロール パネル」->「管理ツール」->「サービス」）。
1. 次の表に示すサービスを選択して、Windows 2000 の場合は、サービスの再起動アイコンをクリックします。また、Windows NT の場合は、「停止」ボタン、「開始」ボタンの順にクリックします（Windows NT のサービスには再起動がありません）。
 2. 必要に応じてスタートアップの種類を「自動」に変更します。表 4-1 に示すサービスは「手動」で開始するように設定されています。スタートアップの種類を変更するには、サービスのプロパティ・シートを開きます。

表 4-1 Windows NT/2000 の「コントロール パネル」の「サービス」に表示される Oracle サービス

サービス名	説明
Oracle<Oracle_Home>Agent	Oracle Intelligent Agent (IA)。Oracle 9iFS がインストールされているマシンで実行されます。
Oracle<Oracle_Home>HTTPServer	Oracle HTTP Server powered by Apache サーバー。Oracle 9iFS がインストールされているマシンで実行されます。
OracleService<SID>	Oracle データベース・サーバーのインスタンス。データベース・マシンで実行されます。

表 4-1 Windows NT/2000 の「コントロール パネル」の「サービス」に表示される Oracle サービス (続き)

サービス名	説明
Oracle<Oracle_Home>Management Service	Oracle Management Server (Oracle Enterprise Management システムの中間層コンポーネント)。企業内の OEM の配置状況によって、データベース・マシン、Oracle 9iFS 中間層サーバー・マシンまたは他の中間層サーバーで実行されます。
Oracle<Oracle_Home>TNSListener	

使用する配置によっては、前述の一部のみが実行される場合があります。たとえば、データベースを 1 台のマシンにインストールし、Oracle 9iFS を別のマシンにインストールする、という複数マシンのインストールでは、Oracle Management Service は、データベースのマシンのみで実行されます。

Oracle HTTP Server powered by Apache (Oracle<Oracle_Home>HTTPServer) の再起動では、Oracle 9iFS Jserv プロセスは起動されません。Oracle 9iFS がインストールされている各マシンで、次のようにして Jserv を手動で再起動する必要があります。

3. Windows のコマンド・プロンプトで、ディレクトリ %ORACLE_HOME%\9iFS\bin に移動し、次のコマンドを実行します。

```
ifsjservctl -start
```

Oracle 9iFS の起動および基本的な操作の確認

この時点で、Oracle 9iFS ノードを起動し、ドメインを起動して、基本的な操作をテストすることができます。単純な作業で Oracle 9iFS を適切に機能させるには、表 4-2 に示す最初の 3 つのバッチ・ファイル (スクリプト) を使用します。これらのスクリプトでドメインおよびノードを起動し、Oracle 9iFS の基本的な機能を確認します。

インストールおよび構成が正常に完了すると、「インストール後のオプションの作業」の項にある、他の作業を実行できます。また、第 5 章「Oracle Enterprise Manager の使用」に進み、Oracle Enterprise Manager と Oracle 9iFS 管理コンソールの統合の設定を完了する必要があります。

表 4-2 に示すすべてのバッチ・ファイルは、次のディレクトリにあります。

```
%ORACLE_HOME%\9iFS\bin
```

表 4-2 ドメインおよびノードのコマンドライン・スクリプト（バッチ・ファイル）

バッチ・ファイル名	機能	説明
ifslaunchdc	ドメイン・コントローラの起動	ドメイン・コントローラとして機能するマシン上でのみ実行します。
ifslaunchnode	Oracle 9iFS のノード・プロセスの起動	Oracle 9iFS がインストールされている各マシンで実行します。
ifsstartdomain	ドメインの起動 (「ドメイン・コントローラの起動」ダイアログ・ボックスが表示され、Oracle 9iFS スキーマ・パスワードが要求されます。)	Oracle 9iFS ドメイン全体で 1 度のみ実行します。各ホスト・マシンで、ノード・プロセスをアクティブにします。
ifsstopdomain	ドメインの停止	Oracle 9iFS ドメイン全体で 1 度のみ実行します。再起動するには、ifslaunchdc、ifslaunchnode および ifsstartdomain を再度実行します。

ドメイン・コントローラ、ノード・プロセスおよびドメインの起動コマンドを表 4-2 に示す順に実行します。ifsstartdomain を実行すると、Oracle 9iFS スキーマ・パスワードを要求するプロンプトが表示され、正しいパスワードを入力すると、「操作は正常に終了しました。」メッセージが表示されます。ドメインおよびノードは操作可能になり、Oracle 9iFS を使用開始できます。

ドメイン・コントローラの起動およびノード・プロセスの起動スクリプトは、コマンド・プロンプトのコンソール・ウィンドウをマシン上で開いたままにします。これらのコンソール・ウィンドウを最初から開かないようにするには、第 5 章「Oracle Enterprise Manager の使用」の手順に従い、Oracle Enterprise Manager を使用して Oracle 9iFS ドメインおよびノードを起動および停止できるようにする必要があります（その場合、これらの処理を実行するために、Windows NT/2000 に Oracle 9iFS 管理者のユーザー・アカウントでログインする必要があります）。

基本的な操作の検証

ドメインおよびノードが起動し、Oracle 9iFS のコア・コンポーネントが動作していることを検証するために、ネットワーク上の他のマシンからシステムに接続してみます。

すべての Oracle 9iFS プロトコルが自動的に起動されるわけではありません。たとえば、Windows NT または Windows 2000 上に Oracle 9iFS を配置した場合、「NFS サーバーの構成」に説明されているとおり、NFS コンポーネントを個別にインストールおよび構成する必要があります。

標準の Oracle 9iFS には、次の 3 つのユーザー・アカウントおよびデフォルト・パスワードが含まれています。

```
scott/tiger
guest/welcome
system/manager
```

表 4-3 基本的な機能

プロトコル またはサーバー	アクセス・アドレスまたはアクセス方法	操作結果
HTTP	http://<hostname>/ifs/files/ifs	ブラウザにログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。 scott/tiger または system/manager を入力し、/ifs ディレクトリのファイルを直接リスト表示します。
Oracle 9iFS Web インタフェース	http://<hostname>/ifs/files	ブラウザに、「Internet File System ログイン」Web ページが表示されます。scott/tiger または guest/welcome で Oracle Internet File System にログインします。
SMB	Windows のエクスプローラから、「ネットワークドライブの割り当て」を選択し、¥¥<hostname>¥root と入力。	Windows ドメインまたはワークグループのユーザー・アカウントを要求するプロンプトが表示されます。管理者としてログインする場合、system/manager の情報にアクセスできます。(scott/tiger、guest/welcome および system/manager のユーザー・アカウント / パスワードは、対応する Windows アカウントを Windows NT/2000 サーバー上に作成しないかぎり、このモードでは使用できません)。詳細は、「 Windows ユーザーが Oracle 9iFS をネットワーク・ドライブとして割り当て可能な方法 」を参照してください。

セキュリティ上の危険を回避するために、インストール後、できるだけ早く system および scott のユーザー・アカウントのパスワードを変更してください。guest アカウントは変更しないでください。変更すると、一部のプロトコルが機能しなくなります。system ユーザー・アカウントも含めたユーザー・アカウント・パスワードの変更については、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

Windows ユーザーが Oracle 9iFS をネットワーク・ドライブとして割当て可能にする方法

Oracle 9iFS の Web インタフェースでは、Oracle 9iFS ユーザーが、Windows NT/2000 のユーザー・アカウントを持たなくても、Oracle 9iFS アカウントを使用してログインできます。ただし、(SMB での) Windows NT/2000 のドライブ割当ては、Windows 固有のセキュリティ・メカニズムによって、Oracle 9iFS とは別に制御されます。Oracle 9iFS ユーザーは、Windows NT/2000 サーバー上の Oracle 9iFS インスタンスに、Windows のファイル共有でアクセスする前に、Windows の認証を受ける必要があります。そのため、ユーザーが Oracle 9iFS NTFS プロトコル・サーバーを Windows ネットワーク・ドライブとして割り当てるには、次の操作が必要です。

- 管理者は、すべての認証済 Oracle 9iFS ユーザーに対して、Windows ユーザー・アカウントを作成する必要があります。
 - Microsoft Windows ドメイン・セキュリティ・モデルを使用している場合、(ドメイン ユーザー マネージャを使用して) ローカル・マシン上ではなく、ドメイン内にユーザー・アカウントを作成する必要があります。(Oracle 9iFS は、ドメイン・プリフィックスを無視し、ユーザー ID のみを調べます。このため管理者は、Oracle 9iFS ユーザー名に割り当てられた Windows ユーザー ID が、複数の Windows ドメイン間で一意であることを確認する必要があります。)
 - Windows ユーザー・アカウントがすでに存在する場合、対応する Oracle 9iFS アカウントを作成する必要があります。
- Windows NT/2000 ドメイン内のユーザーは、Oracle 9iFS サーバーに対してドライブを割り当てるときにプロンプトが表示された場合、有効な Windows NT/2000 ユーザー・アカウントおよびパスワードを入力する必要があります。
 - Windows NT ドメインのユーザーは、ログイン・プロンプトのユーザー・アカウントの一部として、次のように Windows ドメイン名を付ける必要がある場合があります。

```
<windows-nt/2000-domainname>%<userid>
```

たとえば、MyDomain%gking と入力します。

Windows に認証されたユーザーは、Windows アカウントと同じ名前のユーザーで、Oracle 9iFS にアクセスできます。Oracle 9iFS にアカウントを持たないユーザー、または (適切な Windows NT/2000 ユーザー・アカウントを持たないために) Windows に認証されていないユーザーは、自動的に guest としてログインし、制限付きで Oracle 9iFS にアクセスすることになります。

Oracle 9iFS の管理者および Windows NT/2000 の管理者は、適切なユーザー・アカウントが Windows および Oracle 9iFS に作成されたことを確認する必要があります。情報に対する不適切なアクセスを防ぐために、Oracle 9iFS ユーザー・アカウントに対応付けられたユーザーは、Windows NT/2000 アカウントに対応付けられたユーザーと同一である必要があります。

UNIX サーバー上で Oracle 9iFS のインスタンスが実行中の場合、UNIX サーバー上で NTFS プロトコルにアクセスするユーザーは、Windows ユーザー・アカウントおよびパスワードは不要です。ユーザーは、有効な Oracle 9iFS ユーザー・アカウントおよびパスワードを入力するか、または (guest アカウントが使用可能な場合は、) 自動的に guest としてログインします。

Windows NT/2000 ファイル共有のトラブルシューティングのヒント

ユーザーが、Oracle 9iFS インスタンスに対してネットワーク・ドライブを割り当てられない場合、Oracle 9iFS 管理者 (または Windows NT/2000 管理者) は、Oracle 9iFS とは別の、Windows NT/2000 固有のファイル共有を作成し、ユーザーにこれを使用してドライブの割当てをテストさせ、問題が Windows NT/2000 にあるかどうかを判断できます。ユーザーが Windows NT/2000 固有のファイル共有を割り当てられない場合は、Windows NT/2000 のマニュアルを参照して、問題を解決してください。

インストール後のオプションの作業

選択した要件および Oracle 9iFS の配置に応じて、次に示すインストール後の作業を実行できます。

- [Oracle 9iFS メール・サーバーのインストールおよび構成](#)
- [Oracle 9iFS Portlet のインストール](#)
- [NFS サーバーの構成](#)
- [JRE 1.3.0 の使用のサポートに必要な変更](#)
- [Oracle 9iFS サーブレットおよび Oracle HTTP Server](#)

これらのタスクは、デフォルトの JRE のかわりに JRE 1.3.0 を使用する場合を除き、Oracle 9iFS の起動および実行には必須ではありません。JRE 1.3.0 を使用する場合は、[「JRE 1.3.0 の使用のサポートに必要な変更」](#)に説明されているとおり、構成ファイルを変更する必要があります。

Oracle 9iFS メール・サーバーのインストールおよび構成

Oracle 9iFS 電子メール・サーバーを使用するには、使用しているマシンに Sendmail for NT を設定し、それが使用できるように Oracle 9iFS を構成する必要があります。手順は次のとおりです。

1. Sendmail for NT (Windows NT の場合はバージョン 3.0 以上、Windows 2000 の場合はバージョン 3.0.2 以上) をインストールします。
2. ifsemailsetup バッチ・ファイル (ifsemailsetup.bat) を使用して、Oracle 9iFS 電子メール・サーバーを構成します。その際、Sendmail のインストール先をコマンドラインの引数として使用します。次に例を示します。

```
C:\>%ORACLE_HOME%\9ifs\bin\ifsemailsetup e:%PROGRAMS%\Sendmail
```

Oracle 9iFS Portlet のインストール

Oracle 9iFS Portlet は、ユーザーの Oracle 9iFS データに関する情報の概要を提供するための Oracle Portal のコンポーネントです。ユーザーはポートレットを使用して、自分への割当ての表示、検索の開始、ドキュメントやフォルダの一覧表示およびドキュメントのアップロードを行うことができます。ポートレットは、Oracle 9iFS Web インタフェースにリンクしています。Oracle 9iFS ユーザーが Oracle 9iFS Portlet を各自の Oracle Portal に追加できるようにするには、管理者がいくつかの設定手順を実行する必要があります。

Oracle 9iFS Portlet の Oracle Portal への登録

Oracle Portal の管理者は、各自の Oracle Portal のインストールに Oracle 9iFS Portlet を追加できます。そのためには、Oracle Portal のホーム・ページで次のようにしてポートレットを Web プロバイダとして登録します。

1. Oracle Portal のホーム・ページで、「管理」タブをクリックします。
2. 「プロバイダ」ポートレットで、「ポートレット・プロバイダの追加」リンクをクリックします。
3. Web プロバイダを作成するためのフォームに、次のように入力します。

パラメータ	値
名前	9iFS
表示名	Oracle 9iFS
タイムアウト	100
タイムアウト・メッセージ	Oracle 9iFS Portlet がタイムアウトしました。
実装スタイル	Web
リモート・ノードに登録	いいえ
ログイン頻度	ユーザー・セッションごとに 1 回
URL	http://<hostname>:<port>/ifs/portlet
ポータルと同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ	チェックしない

4. 「OK」をクリックします。
- ポートレットを Oracle Portal のホーム・ページに追加する方法の詳細は、Oracle Portal のマニュアルを参照してください。

ポートレット・プロバイダが実行中であることの検証

Oracle 9iFS のポートレット・プロバイダは、次の URL で使用できます。

`http://<hostname>:<port>/ifs/portlet`

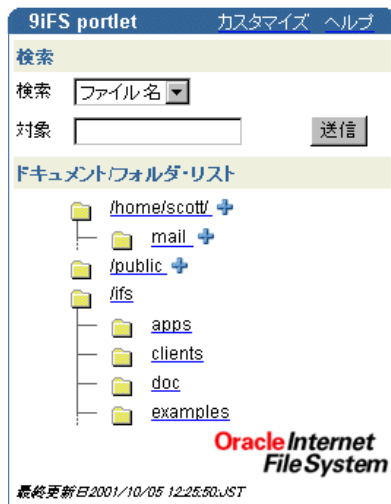
<hostname> には、Oracle 9iFS をインストールしたマシンの名前が入ります。<port> には、Apache リスナーのポートが入ります。

デフォルトのパラメータの編集

Oracle 9iFS Manager を使用して、次に示すポートレットのデフォルトのパラメータを編集できます。これらのパラメータの変更の詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

- ポートレットの割当てセクションを表示するかどうかの設定：
`IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.QuotaDisplayed=[true | false]`
- ポートレットの検索セクションを表示するかどうかの設定：
`IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.SearchDisplayed=[true | false]`
- ファイル / フォルダのリストを表示するかどうかの設定：
`IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.ItemListDisplayed=[true | false]`
- トップレベルのフォルダを拡張できるようにするかどうかの設定：
`IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.ExpandFolders=[true | false]`
- 各トップレベル・フォルダに表示されるアイテム数の設定：
`IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.FolderItemCount=4`
- デフォルトで表示するファイル / フォルダの設定：
`IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.FileList+=HOME_FOLDER`
`IFS.SERVER.PROTOCOL.PORTLET.FileList+=/public`

図 4-1 Oracle 9iFS Portlet



NFS サーバーの構成

Oracle 9iFS Network File System (NFS) プロトコル・サーバーは、プライマリ NFS サーバーとしても、またはセカンダリ NFS サーバーとしても構成できます。UNIX システムでは通常、標準 UNIX NFS サーバーをプライマリ NFS サーバーにして、Oracle 9iFS NFS サーバーをセカンダリ NFS サーバーとして構成します。標準 UNIX NFS サーバーが停止している場合は、Oracle 9iFS NFS サーバーをプライマリ NFS サーバーとして構成できます。Windows NT システムには既存の NFS サーバーがないため、通常は、Oracle 9iFS NFS サーバーを Windows NT のプライマリ NFS サーバーとして構成します。

プライマリ NFS サーバーは、標準 NFS ポート（ポート 2049）で実行されます。プライマリ NFS サーバーおよびプライマリ MOUNT サーバーは、これらのサーバーのポート番号をクライアントで検索できるようにするポートマップ・サーバーにも登録されます。セカンダリ NFS サーバーは、使用されていない他の任意のポートで実行できます。セカンダリ MOUNT サーバーも、使用されていない任意のポートで実行できます。プライマリ NFS サーバーおよびプライマリ MOUNT サーバーの登録が上書きされないように、セカンダリ NFS サーバーおよびセカンダリ MOUNT サーバーはポートマップ・サーバーには登録されません。セカンダリ NFS サーバーおよびセカンダリ MOUNT サーバーはポートマップに登録されないため、クライアントは、セカンダリ NFS サーバーからマウントする際、ポート番号を明示的に指定する必要があります。

NFS のユーザー認証の概要

Oracle 9iFS NFS サーバーでは、システム認証方式を使用しています。システム認証方式の場合、UNIX システムに一度ログインすると、再度 Oracle 9iFS にログインしなくても、NFS サーバーを介して Oracle 9iFS にアクセスできます。UNIX システムにログインするには、UNIX ユーザー名とパスワードを使用します。システム認証を使用すると、UNIX システムへのログイン後に NFS サーバーを介して Oracle 9iFS にアクセスする際に、Oracle 9iFS パスワードを指定する必要がありません。ユーザーは UNIX システムへのログイン時にすでに認証されているため、Oracle 9iFS へのアクセス権限が付与されます。UNIX のパスワードと Oracle 9iFS のパスワードは異なる場合がありますが、これらを同一にする必要はありません。

システム認証方式では、各 UNIX ユーザー・アカウントに割り当てられたユーザー ID 番号 (UID) を使用してユーザーを識別します。この識別では、サーバー・マシンとクライアント・マシンのすべてが共通のユーザー・アカウント定義のセットを共有していることを前提にしています。通常、管理者によってマシンが集中的に管理されているネットワーク環境では、この前提条件が満たされています。このようなネットワーク環境では、すべてのマシンが同一のユーザー・アカウントのセットを共有し、共有されているユーザー・アカウントの UID は、各マシンで同一となります。

Oracle 9iFS NFS サーバーでは、システム認証方式を使用して、クライアントから受信した各要求のユーザーの UID を受信します。Oracle 9iFS NFS サーバーは、この UID を Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングし、このユーザー名を使用して Oracle 9iFS にアクセスします。通常、UID は UNIX ユーザー名と同一の Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングされますが、UNIX ユーザー名とは異なる Oracle 9iFS ユーザー名に UID をマッピングすることもできます。Oracle 9iFS NFS サーバーが UID を Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングできない場合、guest ユーザーとして Oracle 9iFS へのアクセスを許可します。

NFS の Oracle 9iFS ユーザーの構成

Oracle 9iFS NFS サーバーでは、UNIX の UID から Oracle 9iFS ユーザー名へのマッピングを定義するためのファイルを使用します。このファイルは、`/ifs/nfs/config/UidToName` という名前で Oracle 9iFS リポジトリに格納されます。このファイルは、管理者権限があるユーザーが任意の Oracle 9iFS プロトコルを使用して表示または変更できます。このファイルの形式は、UNIX ユーザー名および UID が収められている標準 UNIX パスワード・ファイル (`/etc/passwd`) の形式に似ています。

初期インストールの終了時点では、すべての UNIX UID を Oracle 9iFS の guest ユーザーにマッピングするデフォルトのマッピングが `/ifs/nfs/config/UidToName` ファイルに収められています。UidToName ファイルを更新するには管理者権限が必要であるため、インストール後にこのファイルを最初に更新する場合、管理ユーザーが FTP や SMB などの別のプロトコルを使用して更新する必要があります。

Oracle 9iFS ユーザー名が UNIX ユーザー名と同じ場合、UNIX パスワード・ファイル (`/etc/passwd`) を `/ifs/nfs/config/UidToName` にコピーできます。ファイルをコピーすると、Oracle 9iFS NFS サーバーによって、UID が UNIX ユーザー名と同じ Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングされます。`/etc/passwd` を `/ifs/nfs/config/UidToName`

にコピーした後で、`/ifs/nfs/config/UidToName` ファイルを編集して、UNIX の root ユーザー (UID が 0) を Oracle 9iFS への root アクセスに使用する Oracle 9iFS アカウントに変更してください。セキュリティ上の理由から、root ユーザーは Oracle 9iFS の guest アカウントにマッピングしてください。

Oracle 9iFS ユーザー名が UNIX ユーザー名と異なる場合は、`/ifs/nfs/config/UidToName` ファイルを編集し、UNIX の UID を Oracle 9iFS ユーザー名にマッピングするためのエントリを作成する必要があります。このファイルは UNIX パスワード・ファイルと同じ形式であり、各行はコロン区切りのフィールドで構成されています。Oracle 9iFS NFS サーバーは行を読み取る際に、次に示す最初の 3 つのフィールドのみを読み取ります。

```
username : password : uid :
```

password フィールドは無視され、username フィールドおよび uid フィールドのみを使用して、UID から Oracle 9iFS ユーザー名へのマッピングが作成されます。たとえば、次のエントリでは、UNIX UID 1123 は Oracle 9iFS ユーザー scott にマッピングされ、UNIX UID 1124 は Oracle 9iFS ユーザー guest にマッピングされます。

```
scott:x:1123:  
guest:x:1124:
```

セキュリティに関する考慮点

システム認証方式は、サーバー・マシンとクライアント・マシンが同じユーザー・アカウントおよび UID を共有していることを前提にしています。また、信頼できるクライアント・マシンであること、およびクライアント・マシンへの root アクセスが保護されていることも前提にしています。クライアント・マシンへの root アクセスが保護されていない場合、クライアント・マシン上のユーザーがサーバー・マシン上の別のユーザーと同じ UID を持つユーザーをクライアント・マシン上に作成して、そのユーザーでサーバー・マシン上の NFS に容易にアクセスできてしまいます。

このような理由により、重要なデータが格納されている Oracle 9iFS アカウントに対する Oracle 9iFS NFS サーバー経由のアクセスの制限が必要な場合もあります。`/ifs/nfs/config/UidToName` ファイル内の UID マッピングを変更して、UID が別の Oracle 9iFS ユーザー名 (guest など) にマッピングされるように設定しても同様の効果があります。

グローバルゼーション・サポート

NFS プロトコルの仕様では、ファイル名における非 ASCII 文字の使用は明示的にはサポートされていません。通常、NFS クライアントは、ファイル名などの文字列をクライアントのデフォルトのキャラクタ・エンコーディングで NFS サーバーに転送します。このような文字列を正確に解析するには、サーバー側で文字列を読み取る際にクライアント側と同じキャラクタ・エンコーディングを使用する必要があります。

Oracle 9iFS NFS サーバーには、クライアントから受信した文字列の解析時に使用するキャラクタ・エンコーディングを指定するパラメータがあります。このパラメータを設定するには、Oracle 9iFS Manager を使用して NFS サーバーの構成 (NfsServerConfiguration) を編集し、文字列の値タイプとともに次のパラメータ名を追加します。

IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.CharacterEncoding

このパラメータの値は、ISO8859_1 や CP437 などの Java キャラクタ・エンコーディング名に設定してください。この値が、クライアントから受信した文字列を解析するために Oracle 9iFS NFS サーバーで使用するキャラクタ・エンコーディングになります。

Hummingbird NFS Maestro Client のサポート

Hummingbird 社の NFS Maestro Client では、Oracle 9iFS NFS サーバーで提供されるサービスの他に、いくつかのサービスが必要になります。このサービスには次のものが含まれます。

- NFS サーバーのディレクトリにリンクするクライアントで使用されるユーザー名およびパスワードを検証するための認証サーバー。
- DOS 形式のロックをサポートするロック・サーバー。

Hummingbird 社は、hclnfsd というデーモン・プログラムでこれらのサービスを提供しています。hclnfsd プログラムは、Hummingbird 社によって様々な UNIX プラットフォーム用にコンパイル可能なソース・コード形式で提供されています。hclnfsd プログラムのコンパイルおよび実行の詳細は、Hummingbird NFS Maestro のマニュアルを参照してください。

NFS Maestro Client に対する認証サービスを利用するには、少なくとも 1 台の UNIX マシンで hclnfsd デーモンが実行されている必要があります。hclnfsd デーモンを Oracle 9iFS NFS サーバー・マシン以外のマシンで実行する場合は、NFS Maestro Client は、デフォルトの認証サーバーを hclnfsd デーモンが実行されているマシンに設定してください。

hclnfsd デーモンには、NFS Maestro Client 用の DOS 形式のロックをサポートするロック・サーバーも含まれています。DOS 形式のロックをサポートするには、Oracle 9iFS NFS サーバーと同じマシンで hclnfsd デーモンを実行する必要があります。複数の Oracle 9iFS NFS サーバー・マシンがある場合、hclnfsd デーモンは、これらの各マシンで起動してください。

hclnfsd デーモンを Oracle 9iFS NFS サーバー・マシンで実行していない場合、DOS 形式のロックはそのサーバーにリンクしている NFS Maestro Client には使用できません。DOS 形式のロックが使用できない場合でも、Oracle 9iFS は、2 人のユーザーによって 1 つのファイルが同時に更新されることを回避します。ただし、hclnfsd デーモンが使用不可能な場合に NFS Maestro Client が DOS 形式のロックの使用を試みると、動作が極端に遅くなり、NFS Maestro Client が停止したように見えることがあります。hclnfsd デーモンが使用不可能な場合は、NFS Maestro Client で「DOS-style sharing」ボックスのチェックを解除するか、またはコマンドラインで '/L:' オプションを指定することにより、DOS 形式のロックを無効化してください。

Windows NT 上の Oracle 9iFS サーバーでの考慮点

hcnfsd デーモンは、UNIX ベースのプログラムです。Windows NT システムで Oracle 9iFS NFS サーバーを実行する場合、認証サーバーとして hcnfsd デーモンを実行するネットワークには少なくとも 1 つの UNIX システムが必要です。Oracle 9iFS NFS サーバーを実行する Windows NT システムでは hcnfsd デーモンを実行できないため、Windows NT 上で実行される Oracle 9iFS NFS サーバーでは DOS 形式のロックを使用できません。Windows NT 上で実行される Oracle 9iFS NFS サーバーにリンクしている NFS Maestro Client では、DOS 形式の共有を無効化してください。

制限事項

Oracle 9iFS NFS サーバーには、次のような制限事項があります。

- Oracle 9iFS NFS サーバーでは、バージョンングされたドキュメントのチェックアウト済バージョンへのアクセスは許可されません。

これは、NFS クライアントのファイルのキャッシング・アルゴリズムに違反するためです。NFS では、パフォーマンスを向上させるために、クライアントでファイルをキャッシュします。クライアントのキャッシング・アルゴリズムでは、すべてのユーザーに対してファイルの内容が同じであること、およびキャッシュされたファイルの内容をそのファイルを要求する他のユーザーに返すことができることを前提としています。ドキュメントをチェックアウトしたユーザーは、他のユーザーとは異なる内容のドキュメントを参照する可能性があるため、チェックアウト済バージョンのドキュメントへのアクセスを許可すると、このルールに違反することになります。

- バージョニングされたドキュメントの削除、移動または名前の変更はできません。

これは、MS Office などのプログラムが、バージョンングされたドキュメントの旧バージョンを削除しないようにするためのルールです。MS Office などのプログラムがファイルを保存する場合、最初にデータをテンポラリ・ファイルに保存し、続いて元のファイルを削除してから、テンポラリ・ファイルの名前を元のファイル名に変更します。バージョンングされたドキュメントの場合、このように処理すると旧バージョンが失われます。

- Oracle 9iFS NFS サーバーから返されたハンドルは、UNIX のロック・マネージャ (NLM) との互換性はありません。

プログラムが Oracle 9iFS NFS サーバーのファイルをロックしようとする、UNIX のロック・マネージャからエラーが返されます。UNIX のロック・マネージャを必要とするプログラムは、Oracle 9iFS NFS サーバーでは使用できません。

- UNIX リンク（ハード・リンクおよびシンボリック・リンク）はサポートされていません。

UNIX 形式のリンクには、Oracle 9iFS との互換性はありません。UNIX 形式ではなく、Oracle 9iFS リンクが使用されます。

- UNIX の `chown`、`chgrp` および `chmod` の各コマンドによる、ファイルの所有者、グループまたはモードの変更はサポートされていません。

Oracle 9iFS コマンドライン・ユーティリティを使用して、ファイルの所有者および Access Control List を変更できます。

JRE 1.3.0 の使用のサポートに必要な変更

デフォルトでは、Oracle 9iFS は、(Oracle HTTP Server powered by Apache の一部として出荷される) JRE 1.2.2_07 を使用します。また、Oracle 9iFS は、SDK1.2.2_07 および JRE 1.3.0 にも対応しています。Oracle 9iFS サーバーで JRE 1.3.0 を使用できるように構成するには、デフォルトの JRE の場所への参照を含むいくつかのファイルを変更して、使用しているシステム上の JRE 1.3.0 の正しい場所を指すようにする必要があります。

1. (%ORACLE_HOME%\9ifs\bin ディレクトリに格納されている) ifsend.bat で、IFS_JRE として JRE 1.3.0 を指すように変更します。

例：

```
IFS_JRE = %IFS_HOME%\jre
```

このエントリを次のエントリで置き換えます。

```
IFS_JRE = <jre_home_for_1.3.0>
```

<jre_home_for_1.3.0> は、JRE 1.3.0 の場所を示します。

2. (%ORACLE_HOME%\9ifs\settings にある) Node.def を変更します。

例：

```
IFS.DOMAIN.NODE.JavaCommand=%ORACLE_HOME%\9ifs\jre\bin\java -mx256m
```

このエントリを次のエントリで置き換えます。

```
IFS.DOMAIN.NODE.JavaCommand=<jre_home_for_1.3.0>\bin\java -mx256m
```

3. IfsManager.def ファイルを変更します。

例：

```
DashboardJVMCommand = <IFS_JRE>\bin\java
```

このエントリを次のエントリで置き換えます。

```
DashboardJVMCommand = <jre_home_for_1.3.0>\bin\java
```

4. Oracle 9iFS サブレットを Oracle 9iFS Jserv プロセスで実行している場合 (Oracle 9iFS のデフォルト構成の場合) は、%ORACLE_HOME%\Apache\Jserv\conf に格納されている ifspops.properties ファイルで、Java Virtual Machine インタプリタの場所を変更します。

例：

```
wrapper.bin = %ORACLE_HOME%\9ifs\jre\bin\java  
このエントリを次のエントリで置き換えます。
```

```
wrapper.bin = <jre_home_for_1.3.0>\bin\java
```

5. (4-16 ページの「[Oracle 9iFS サブレットおよび Oracle HTTP Server](#)」に説明されているとおり) Oracle 9iFS サブレットを標準の Oracle Jserv プロセスで実行している場合は、%ORACLE_HOME%\Apache\Jserv\conf に格納されている jserv.properties ファイルで、Java Virtual Machine インタプリタの場所を変更します。

例：

```
wrapper.bin = %ORACLE_HOME%\Apache\jdk\bin\java
```

このエントリを次のエントリで置き換えます。

```
wrapper.bin = <jre_home_for_1.3.0>\bin\java
```

6. ドメイン・コントローラ、Oracle 9iFS ノード、および Oracle 9iFS Jserv プロセスまたは Oracle HTTP Server powered by Apache を停止し、再起動します。

注意： ifsconfig を再実行する場合は、この変更をもう一度行う必要があります。

Oracle 9iFS サブレットおよび Oracle HTTP Server

Oracle9i 用の Oracle HTTP Server は、Jserv と組みになった Apache をベースにしています。このインフラストラクチャの元でサブレットを実行する方法は 2 通りあります。

- Oracle 9iFS Jserv プロセス
- 標準の Oracle Jserv プロセス

Oracle 9iFS Jserv プロセス

Oracle 9iFS のデフォルトの Jserv 構成は、コマンドラインから手動で起動する必要がある、個別の Jserv プロセスです（後述の「[Oracle 9iFS の Jserv プロセスの起動と停止](#)」を参照）。Jserv プロセスは、個別のプロセスとして実行し、他のポートでリスニングします。Oracle 9iFS のインストール時、Oracle 9iFS サブレットを実行しているプロセスが、Jserv プロセスです。

%ORACLE_HOME%\Apache\Jserv\conf に格納される構成ファイルには、jserv.conf、ifs.properties および ifsprops.properties があります。デフォルトの Oracle 9iFS の動作には、これらのファイルを変更する必要はありませんが、次のようにして Jserv プロセスを起動する必要があります。

Oracle 9iFS の Jserv プロセスの起動と停止

%ORACLE_HOME%\9ifs\bin ディレクトリにある ifsJservctl バッチ・ファイルを使用します。

ifsJservctl -start	9iFS Jserv プロセスを起動します。
ifsJservctl -stop	9iFS Jserv プロセスを停止します。

標準の Oracle Jserv プロセス

標準の Oracle Jserv プロセスは、Oracle HTTP Server の起動時に、Oracle HTTP Server の Web サーバーによって起動されます。Oracle Jserv プロセスは、Oracle HTTP Server と同じプロセス領域で実行し、同じポートでリスニングします。

(デフォルトの Oracle 9iFS Jserv プロセスではなく) 標準の Oracle Jserv プロセスを使用するには、次に示すとおり、いくつかの構成ファイルを変更する必要があります。

標準の Oracle Jserv プロセスで Oracle 9iFS Servlet を実行

この構成を使用するには、%ORACLE_HOME%\Apache\Jserv\conf ディレクトリに格納されている次のファイルを変更する必要があります。

1. jserv.conf

次の行からコメント記号 (#) を削除します。

```
#ApJservMount /ifs /ifs
```

次の行をコメント・アウトします (「#」を追加します)。

```
ApJservMount /ifs ajpv12://localhost:13138/ifs
```

このファイルでは、各行の上に説明が記載されています。

2. jserv.properties

ファイル内の「# Additions for iFS」セクション内のみで、すべてのラッパー宣言およびゾーン宣言からコメント記号 (#) を削除します。このセクションは、ファイル内で明確にマークされています。

Oracle 9iFS の Jserv プロセスが実行中の場合はこれを停止し、Oracle HTTP Server を再起動します。Oracle 9iFS のサーブレットは、Oracle HTTP Server を起動または停止することによって使用可能になります。

Oracle Enterprise Manager の使用

Oracle 9iFS 管理ソフトウェアは、Oracle Enterprise Manager と統合されています。この章では、Oracle Enterprise Manager リポジトリおよび Oracle Management Server の新規作成、および OEM とともに使用できるように Oracle 9iFS を設定する方法について説明します。また、Oracle 9iFS のノードおよびドメインの起動および停止に関する基本的な情報も示します。次の項目について説明します。

- [Oracle Enterprise Manager の設定](#)
- [Oracle Enterprise Manager の自動操作をサポートするための Oracle 9iFS の設定](#)

詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager の設定

Oracle 9iFS インストール用に新規の Oracle Enterprise Manager (OEM) リポジトリおよび Oracle Management Server (OMS) を設定するには、次に示す手順を実行します。これらの手順は、環境に最初の OMS を作成することと、OEM が「インストール前の処理」の「作業 4: Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースのインストール (またはこれらリリースへのアップグレード)」と同じデータベース・インスタンス (Oracle 9iFS リポジトリを格納するのと同じデータベース) にインストールされることが前提です。OEM リポジトリおよび OMS が、すでに環境で実行中の場合、この作業を行う必要はありません。

Oracle Enterprise Manager を設定するには、Windows NT マシンまたは Windows 2000 マシンに、管理者 (または Oracle データベースをインストールした管理者権限のある別のユーザー) でログインします。

データベース・インスタンスに対して SYSDBA 権限 (system/manager など) のあるアカウント名およびパスワードを知っている必要があります。Enterprise Manager Configuration Assistant は、データベースにログインするためにユーザーが入力した資格証明を使用し、既存のデータベースに OEM リポジトリに対するスキーマ名 (デフォルトは OEM_REPOSITORY) を作成します。

Oracle Management Server (OMS) および Oracle Enterprise Manager リポジトリの作成

1. Windows NT または Windows 2000 の「スタート」メニューから「プログラム」->「Oracle - <Oracle_Home>」->「Configuration and Migration Tools」->「Enterprise Manager Configuration Assistant」を選択します。別の方法として、コマンド・プロンプトで次のように入力して、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant (EMCA) を起動することもできます。

```
c:\>%ORACLE_HOME%\bin\emca
```

2. 「ようこそ」ページで「次へ」をクリックします。
3. 「構成操作」ページで、「ローカルの Oracle Management Server を構成します。」を選択して「次へ」をクリックします。

構成がすでに存在する場合、その構成を編集するか、または新しい構成を作成するかを選択するダイアログ・ボックスが表示されます。「編集」ボタンまたは「作成」ボタンをクリックします。構成を変更する必要がある場合以外は、既存の構成は編集しないでください。

4. 「Oracle Management Server の構成」ページで「新規リポジトリの作成」を選択し、「次へ」をクリックします。「新規リポジトリの作成オプション」ページが表示されます。
 - 環境に作成する OMS が 1 つ目ではなく、既存のリポジトリを指すために追加の OMS を作成する場合は、「既存リポジトリの使用」を選択します。

5. 「新規リポジトリ作成オプション」 ページで「カスタム」を選択し、「次へ」をクリックします。「データベースの場所の選択」 ページが表示されます。
6. 「データベースの場所の選択」 ページで「別の既存データベース内」を選択し、「次へ」をクリックします。「リポジトリのデータベースの選択」 ページが表示されます。
7. 「リポジトリのデータベースの選択」 ページで、2-8 ページの「作業 4: Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースのインストール (またはこれらリリースへのアップグレード)」でインストールされたデータベースに対するサービス名、アカウント名およびパスワード情報を入力します。アカウントには、データベースに対する SYSDBA 権限が必要です。たとえば、system/manager などです。EMCA は、ここで入力された情報を使用してデータベースに接続し、OEM リポジトリおよび関連するユーザー・アカウントとパスワードに対するスキーマを作成します。「接続モード:」に SYSDBA が選択されていることを確認してください。
8. 「次へ」をクリックします。「リポジトリへのログイン情報」 ページが表示されます。
9. 「リポジトリへのログイン情報」 ページで、OEM リポジトリに対する一意のユーザー (スキーマ) 名を入力します。名前は、ネットワーク全体で一意である必要があります。OEM の Intelligent Agent は、リポジトリ名によって OMS に情報を送信します。そのため、同じ名前を持つ 2 つ以上の OEM リポジトリがあると、アドレッシングに問題が発生します。

注意： このユーザー名とパスワードは ifsomsssetup バッチ・ファイルを実行する際に必要になるため、後で参照できるように、ユーザー名とパスワードを書き留めておくことをお勧めします。

10. 「次へ」をクリックします。「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」 ページが表示されます。
 11. 「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」 ページで、新規に OEM_REPOSITORY 表領域を作成するためにデフォルト値のままにし、「次へ」をクリックします。「リポジトリ作成のサマリー」 ページが表示され、これまでに入力したすべての構成の詳細 (スキーマ (ユーザー) 名、ターゲットのデータベース、表領域名など) の概要が示されます。
 12. 設定を確認したら、「完了」 ボタンをクリックします。OEM リポジトリ用の表領域、スキーマおよびデフォルトの管理アカウントが作成されます。
- プロセスの完了には、数分かかります。完了したら、続けて次の作業を行います。

Oracle 9iFS のノードおよびドメインの起動

次の手順で Oracle 9iFS ノードおよびドメインを起動できます。

1. Windows NT または Windows 2000 の「スタート」メニューから「プログラム」->「Oracle - <Oracle_Home>」->「Enterprise Manager Console」を選択します。

別の方法として、次のコマンドライン・オプションを使用して Oracle Enterprise Manager コンソールを起動し、OMS に接続することもできます。

```
c:\>%ORACLE_HOME%\bin oemctl start oms
```

OMS に接続することによって Oracle Enterprise Manager に最初にログインするとき、OMS 管理者 sysman のパスワードを、デフォルトの初期パスワード oem_temp から変更することを要求するプロンプトが表示されます。

- OMS のステータスを確認または OMS を停止するには、sysman のパスワードが oemanager であるとすれば、次のように入力します。

```
c:\>%ORACLE_HOME%\bin oemctl status oms sysman/oemanager
```

```
c:\>%ORACLE_HOME%\bin oemctl stop oms sysman/oemanager
```

2. oemapp console バッチ・ファイルを使用し、Oracle Enterprise Manager を起動して OMS に接続します。
3. Oracle Enterprise Manager コンソールの「ナビゲータ」メニューから「ノードの検出」を選択し、すべての中間層マシンで、Oracle 9iFS ターゲットを検出します。検出ウィザードを起動します。Oracle 9iFS ノード名 (Oracle 9iFS マシンのホスト名) を入力します。検出ウィザードで Oracle 9iFS ノードに関する情報をリフレッシュ (または、初めて実行する場合は作成) します。
4. ナビゲータで起動する Oracle 9iFS ドメイン・コントローラを選択し、「オブジェクト」メニューの「ドメインの開始」をクリックします。

ノードの停止、ドメインの停止およびその他のすべての Oracle 9iFS 管理作業の詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager の自動操作をサポートするための Oracle 9iFS の設定

Oracle Enterprise Manager フレームワークは、障害からの自動リカバリをサポートし、その他のプロアクティブなリモート管理機能 (特に修正ジョブ機能) を提供します (詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください)。Windows NT および Windows 2000 マシンで、Oracle 9iFS が、これらの機能を活用できるようにするには、次の手順を実行します。

- 管理者アカウント (または Oracle 9iFS ソフトウェアのインストールに使用したアカウント) に対して、「バッチ ジョブとしてログオン」ユーザー権利を使用可能にします。

- ifsomsssetup バッチ・ファイルを実行します。

次に、これらの作業について説明します。

Windows NT マシンで「バッチ ジョブとしてログオン」権利を使用可能にする手順

次に示す手順では、Oracle 9iFS のインストールに、管理者アカウントが使用されていることを前提とします。

1. ユーザー マネージャを開きます（「スタート」->「プログラム」->「管理ツール（共通）」->「ユーザー マネージャ」）。Windows NT ユーザー マネージャ（または Windows NT Server の場合は、ドメイン ユーザー マネージャ）が表示されます。
2. 「原則」メニューから「ユーザーの権利 ...」を選択します。「ユーザー権利の原則」画面が表示されます。
3. 画面の左下にある「高度なユーザー権利の表示」チェックボックスをクリックします。
4. 「権利」ドロップダウン・メニューから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
5. 「追加 ...」ボタンをクリックします。
6. Oracle 9iFS のインストールに使用したユーザー・アカウントを追加します。通常は管理者アカウントか、またはその他の管理者グループのユーザー・アカウントです。
7. 「OK」をクリックしてダイアログ・ボックスを閉じます。
8. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「ユーザー権利の原則」ダイアログ・ボックスを閉じます。

Windows 2000 マシンで「バッチ ジョブとしてログオン」ポリシーを使用可能にする手順

次に示す手順では、Oracle 9iFS のインストールに、管理者アカウントが使用されていることを前提とします。

1. コントロール パネルを開きます（「スタート」->「設定」->「コントロール パネル」）
2. 「管理ツール」をダブルクリックします。
3. 「ローカル セキュリティ ポリシー」ツールをダブルクリックして、「ローカル セキュリティ設定」ウィンドウを表示します。
4. ツリーから「ローカル ポリシー」->「ユーザー権利の割り当て」を選択します。
5. リストから「バッチ ジョブとしてログオン」ポリシーをダブルクリックして、設定ダイアログ・ボックスを表示します。
6. 「追加 ...」ボタンをクリックして、ユーザーとグループのリストを表示します。

7. Oracle 9iFS のインストールに使用したユーザー・アカウントを追加します。通常は管理者アカウントか、またはその他の管理者グループのユーザー・アカウントです。
8. リストをスクロールして、権利を与えるユーザーとグループの名前をクリックして選択します。
9. 「追加」ボタンをクリックします。ユーザーまたはグループの名前がダイアログ・ボックスの下部に表示されます。

ユーザーおよびグループを追加し終えたら「OK」をクリックします。ウィンドウが閉じます。「OK」をクリックして「ローカルセキュリティ ポリシーの設定」ダイアログ・ボックスを閉じると、変更内容が保存されます。

ifsumssetup バッチ・ファイルの実行

Windows NT または Windows 2000 のコマンド・プロンプトから、
%ORACLE_HOME%\9ifs\bin ディレクトリに移動して、次の手順でバッチ・ファイルを実行します。

```
ifsumssetup <oem_repos_schema_name> <schema_password> <oem_tns_service_name>
```

- <oem_repos_schema_name> および <schema_password> は、既存の OEM リポジトリ・スキーマの名前およびパスワードです。
- <oem_tns_service_name> は、OEM リポジトリ・データベースのローカル TNS 名（サービス名）です。

第 2 章「インストール前の処理」の「作業 8: 中間層マシンまたは Oracle9i ホームの準備」に従って、新規に OEM リポジトリ・スキーマおよび OMS を作成した場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant (EMCA) で指定した値を入力します。サービス名は、データベース・インスタンス名です。

ifsumssetup が正常に実行されると、コンソールで次のように表示されます。

```
..10%..20%...100%
```

ifsumssetup の実行後、表 4-1 に説明されているとおりに、Oracle Management Server を再起動します。

Oracle 9iFS の管理の詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』の第 2 章「Oracle 9iFS ドメインの管理」を参照してください。

クライアント・パッケージのインストール

この章では、Oracle 9iFS で使用するクライアント・パッケージのインストール方法を説明します。管理者およびエンド・ユーザー向けの様々なクライアントがあります。次の項目について説明します。

- [Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール](#)
- [HTTP を介した Oracle 9iFS へのアクセス](#)
- [Oracle 9iFS Portlet の Oracle Portal への登録](#)
- [Oracle 9iFS FileSync ユーティリティのインストール](#)
- [コマンドライン・クライアント・ユーティリティのインストール](#)
- [NFS クライアントの構成](#)

Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール

Oracle 9iFS Windows ユーティリティにより、Microsoft Windows クライアントでチェックイン / チェックアウトやバージョンニングなどのコンテンツ管理機能を使用できます。

注意： Oracle 9iFS Windows ユーティリティをインストールせずに、Microsoft Windows から Oracle 9iFS にアクセスすることは可能です。このインストールでは、Microsoft Windows の標準構成には含まれないダイアログ・ボックスとメニューのオプションのみがいくつか追加されます。これらのユーティリティがない場合でも、ネットワーク・ドライブとして Oracle 9iFS にマップすること、または「ネットワーク コンピュータ」を使用して表示することができます。

Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール・パッケージは、Oracle 9iFS サーバーの /ifs/clients/winui ディレクトリにロードされます。Windows クライアントからこのディレクトリにアクセスするには、SMB を使用してネットワーク・ドライブをマップするか、または「ネットワーク コンピュータ」を使用します。FTP を使用して、このディレクトリにアクセスすることもできます。

Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストールは、次の手順で行います。

1. 起動しているすべての Windows アプリケーションを保存および終了します。
2. /ifs/clients/winui/ ディレクトリの Setup.exe ファイルまで移動します。
3. Setup.exe をダブルクリックして実行するか、または「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」コマンドから実行します。
4. 管理者から特に指示されていないかぎり、次の手順に従い、デフォルトを受け入れます。

デフォルトでは、Oracle 9iFS Windows ユーティリティは次のディレクトリにインストールされます。

C:\Program Files\Oracle\Oracle9iFS Utilities 9.0.1.1.0

次に示す 3 つの必須 Microsoft コンポーネントがシステムにインストールされていない場合は、これらがインストールされます。

- a. Windows Sockets Version 2 (WinSock2) : Windows 98 以降のすべての Windows プラットフォームでは、オペレーティング・システムとともに WinSock2 が事前にインストールされています。WinSock2 がインストールされていない Windows 95 クライアントには、Oracle 9iFS インストーラによりインストールされます。

- b. **Common Control 4.0 Upgrade:** システムに Microsoft Common Control 4.0 がインストールされていない場合は、Oracle 9iFS インストーラによりアップグレード版がインストールされます。アップグレードを確認するメッセージが表示されたら、「はい」を選択します。
 - c. **HTML Help 4.0:** システムに Microsoft HTML Help 4.0 がインストールされていない場合は、Oracle 9iFS インストーラによりインストールされます。Oracle 9iFS Windows ユーティリティのヘルプを正常に使用できるようにするには、アップグレードを確認するメッセージが表示されたときに「はい」を選択します。
5. Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストール後に、マシンを再起動する必要があります。

Oracle 9iFS Windows ユーティリティのインストールが完了すると、Windows エクスプローラの「ファイル」メニューおよびポップアップ・メニュー（右クリック・メニュー）に Oracle 9iFS 拡張機能用のメニューが表示されます。ポップアップ・メニューを表示するには、Oracle 9iFS ドライブ上のファイルまたはフォルダを右クリックします。

HTTP を介した Oracle 9iFS へのアクセス

HTTP を介して Oracle 9iFS にアクセスするには、次の URL を使用します。

`http://<server-name>:<port-number>/ifs/files`

この URL は、次のようなアクセスの場合に必要です。

- Web ブラウザを介したアクセス
- Web フォルダなどの DAV アプリケーションを介したアクセス
- FileSync 機能を使用したサーバーへのアクセスまたは接続

Oracle 9iFS Portlet の Oracle Portal への登録

Oracle 9iFS Portlet は、ユーザーに対して各自の Oracle 9iFS データに関する情報の概要を提供するための Oracle Portal のコンポーネントです。ユーザーはポートレットを使用して、自分への割当ての表示、検索の開始、ドキュメントやフォルダの一覧表示およびドキュメントのアップロードを行うことができます。ポートレットは、Oracle 9iFS Web インタフェースにリンクしています。

Oracle Portal の管理者は、各自の Oracle Portal のインストールに Oracle 9iFS Portlet を追加できます。そのためには、Oracle Portal のホーム・ページで次のようにしてポートレットを Web プロバイダとして登録します。

1. Oracle Portal のホーム・ページで、「管理」タブをクリックします。
2. 「プロバイダ」ポートレットで、「ポートレット・プロバイダの追加」リンクをクリックします。

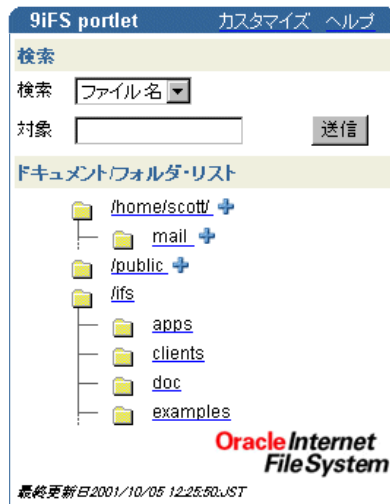
3. Web プロバイダを作成するためのフォームに、次のように入力します。

パラメータ	値
名前	9iFS
表示名	Oracle 9iFS
タイムアウト	100
タイムアウト・メッセージ	Oracle 9iFS Portlet がタイムアウトしました。
実装スタイル	Web
リモート・ノードに登録	いいえ
ログイン頻度	ユーザー・セッションごとに 1 回
URL	http://<hostname>:<port>/ifs/portlet
ポータルと同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ	チェックしない

4. 「OK」をクリックします。

ポートレットを Oracle Portal のホーム・ページに追加する方法の詳細は、Oracle Portal のマニュアルを参照してください。

図 6-1 Oracle 9iFS Portlet



Oracle 9iFS FileSync ユーティリティのインストール

FileSync ユーティリティにより、Oracle 9iFS の限定的な非接続クライアントを使用できるようになります。このユーティリティは、Windows クライアントにのみインストールできます。FileSync ユーティリティをインストールするには、Oracle 9iFS リポジトリの /ifs/clients/filesync ディレクトリに格納されている Setup.exe 自己インストール・ファイルを実行します。このファイルには、SMB、Web フォルダまたは Web インタフェースを使用してアクセスできます。次の手順を実行します。

1. /ifs/clients/filesync から Setup.exe ファイルをローカル・マシンにダウンロードし、このファイルを実行します。これで、FileSync ユーティリティがローカル・マシンにインストールされます。
2. 「スタート」->「プログラム」を選択し、「Oracle9iFS FileSync」プログラム・メニューを選択します。

FileSync ユーティリティの使用の詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。

注意： 場合によっては、競合解消の画面で「スキップ」オプションのみが使用可能になります。これは、FileSync では解決できない競合が発生していることを示します。たとえば、クライアントでファイルの名前を変更したが、サーバー上では、そのファイルの親フォルダが削除されているため、目的のファイルがすでに存在しない場合などです。他のファイルすべてを正常に同期させるには、このファイルの同期を保留する必要があります。そのために、「スキップ」オプションのみが使用可能になります。

コマンドライン・クライアント・ユーティリティのインストール

Oracle 9iFS コマンドライン・クライアント・ユーティリティは、Oracle 9iFS がインストールされているマシン上で使用できます。また、Solaris クライアントや Windows クライアントにインストールすることもでき、ディレクトリを Oracle 9iFS サーバーからローカル・マシンのディレクトリにコピーしてインストールすることも可能です。

SMB を使用してネットワーク・ドライブを割り当てるか、またはローカル・マシンの「ネットワーク コンピュータ」または「マイ ネットワーク」を使用してこれらのディレクトリにアクセスできます。FTP を使用して、これらのディレクトリにアクセスすることも可能です。

注意： 個々のクライアント・マシンにコマンドライン・ユーティリティをインストールしない場合は、次の作業を実行する必要はありません。

Oracle 9iFS コマンドライン・ユーティリティのインストールは、次の手順で行います。

1. コマンドライン・ユーティリティをインストールするローカル・マシン上でディレクトリを決定し、そのディレクトリに移動します。たとえば、Windows クライアント・マシンの場合は、次のように行います。

```
c:¥>cd cmdline
```

2. Windows NT/2000 クライアントまたは FTP ソフトウェアを使用する場合は、ネットワーク・ドライブを Oracle 9iFS サーバーに割り当てます。具体的な場所はクライアントによって異なります。
 - Solaris クライアントにインストールする場合は、ディレクトリを /ifs/clients/cmdline/unix に変更します。
 - Windows クライアントにインストールする場合は、ディレクトリを /ifs/clients/cmdline/win32 に変更します。

3. 使用しているマシンの適切なプラットフォーム・ディレクトリの内容を、前述の例の `c:¥cmdline` などのローカル・ディレクトリにコピーします。
4. `ifscmdline.sh` ファイルまたは `ifscmdline.bat` ファイル内の次のパラメータを編集します。Windows クライアントの場合は、ワードパッドを使用し、この形式で保存します。
 - `IFS_CMD_CLASSPATH`: `cmdlineutils.jar` ファイルの格納場所。ローカル・マシン上のパスに設定します。たとえば、前述の例では `c:¥cmdline¥cmdlineutils.jar` に設定します。
 - `IFS_COOKIE_DIRECTORY`: コマンドライン・クライアント・ユーティリティのセッション情報は、`IfsCookie` ファイルに保持されます。このファイルは、ユーザーがログインするたびに生成されます。この変数で、このファイルのローカル・システムでの格納場所を指定します。この変数を設定しない場合、`IfsCookie` ファイルは現在の作業ディレクトリに格納されます。
 - `JRE_CMD`: SDK バイナリの格納場所。たとえば、`C:¥sdk1.2.2¥bin¥java` と指定します。
 - `IFS_CUP_SERVER`: この変数は、Commandline Utility Protocol (CUP) サーバーを実行するサーバーに設定します。たとえば、`ifstestmachine` と指定します。CUP サーバーはローカル・マシンでは使用できないため、クライアント・マシンでコマンドライン・ユーティリティを実行する場合は必ずこの変数を設定する必要があります。
 - `IFS_CUP_PORT`: すべての Oracle 9iFS コマンドは、デフォルトのポート (4180) を使用して CUP サーバーにアクセスします。CUP サーバーが 4180 以外のポートで起動している場合は、この変数を該当するポート番号に設定する必要があります。たとえば、CUP サーバーがポート 4182 で起動している場合、この変数は 4182 に設定します。

コマンドライン・ユーティリティの詳細は、『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』を参照してください。

NFS クライアントの構成

Network File System (NFS) プロトコルは、ネットワーク上のクライアント・マシンとサーバー・マシン間でファイルを共有するために使用されます。NFS プロトコルは、複数の UNIX プラットフォームでのファイル共有に広く使用されている標準プロトコルです。NFS プロトコルは、主に UNIX プラットフォームで使用されますが、オペレーティング・システムに依存しないように設計されているため、Windows など、その他のプラットフォームに実装することもできます。この項では、各種プラットフォームに NFS クライアントをインストールする方法を説明します。

Solaris 7 または 8

Oracle 9iFS NFS サーバーをそのホストのプライマリ NFS サーバーとして実行している場合は、標準の `mount` コマンドを使用して Oracle 9iFS をマウントできます。

構文：

```
mount <host>:<pathname> <mount_point>
```

例：

```
mount ifsserver:home /data/ifs
```

Oracle 9iFS NFS サーバーがそのホストのプライマリ NFS サーバーではない場合は、Oracle 9iFS NFS サーバーのポート番号を明示的に指定する必要があります。次のコマンドを使用して、セカンダリ Oracle 9iFS サーバーをマウントできます。

構文：

```
mount -o port=4049,public <host>:<pathname> <mount_point>
```

例：

```
mount -o port=4049,public ifsserver:home /data/ifs
```

構文：

```
mount nfs://<host>:4049/<pathname> <mount_point>
```

例：

```
mount nfs://ifsserver:4049/home /data/ifs
```

Red Hat Linux 6.2

Oracle 9iFS NFS サーバーをそのホストのプライマリ NFS サーバーとして実行している場合は、標準の `mount` コマンドを使用して Oracle 9iFS をマウントできます。

構文：

```
mount <host>:<pathname> <mount_point>
```

例：

```
mount ifsserver:home /data/ifs
```

Oracle 9iFS NFS サーバーがそのホストのプライマリ NFS サーバーではない場合は、Oracle 9iFS NFS サーバーおよび Oracle 9iFS MOUNT サーバーのポート番号を明示的に指定する必要があります。次のコマンドを使用して、セカンダリ Oracle 9iFS サーバーをマウントできます。

構文：

```
mount -o port=4049,mountport=4048 <host>:<pathname> <mount_point>
```

例：

```
mount -o port=4049,mountport=4048 ifsserver:home /data/ifs
```

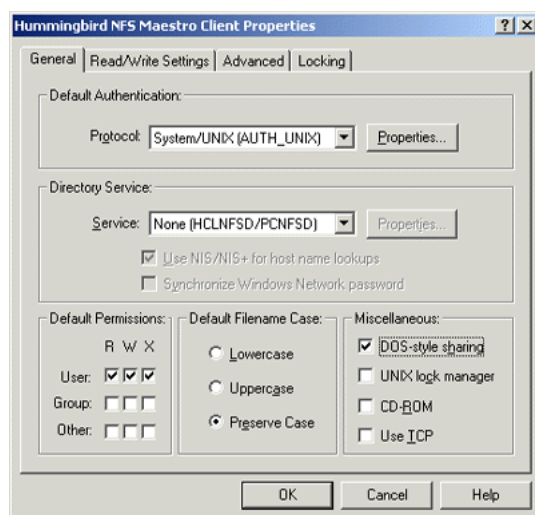
Hummingbird NFS Maestro 7.0

Hummingbird NFS Maestro Client を使用して Oracle 9iFS NFS サーバーにアクセスする前に、NFS Maestro Client が正しく構成されていることを確認する必要があります。

Hummingbird NFS Maestro の構成

1. 「コントロール パネル」から「ネットワーク」を選択します。
2. 「NFS Maestro Client」を選択し、そのプロパティを表示します。NFS Maestro Client のプロパティを設定する手順の詳細は、Windows 98、Windows NT または Windows 2000 のいずれで設定を行うかによって異なります。次のような「Hummingbird NFS Maestro Client Properties」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 6-2 「Hummingbird NFS Maestro Client Properties」ダイアログ・ボックス



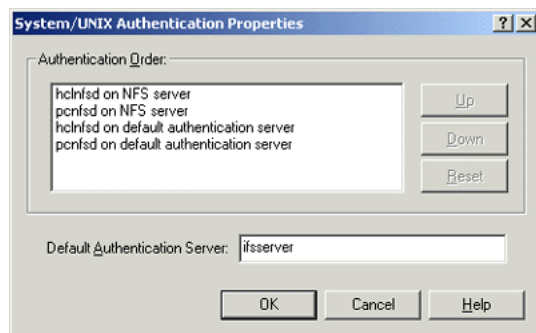
3. 「Default Authentication」を「System/UNIX」に設定します。これは、Oracle 9iFS NFS サーバーがサポートする唯一の認証方式です。

4. 「Default Filename Case」を「Preserve Case」に設定します。
5. 「Miscellaneous」の値を次のように設定します。
 - **DOS-style sharing:** 通常、NFS Maestro で DOS 形式のファイル共有をシミュレートすることを指定します。DOS 形式のファイル共有をサポートするには、NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンが実行されている必要があります。NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンが実行されていない場合は、NFS サーバー上のファイルへのアクセスが遅くなります。このような場合は、「DOS-style sharing」ボックスのチェックを解除します。
 - **UNIX lock manager:** Oracle 9iFS NFS サーバーには UNIX のロック・マネージャ (NLM) との互換性はありません。このボックスはチェックしないでください。
 - **CD-ROM:** 共有ディレクトリが CD-ROM または読取り専用ファイル・システムである場合に使用します。このボックスはチェックしないでください。
 - **Use TCP:** NFS サーバーに接続する際に UDP ではなく TCP を使用する場合に、このボックスをチェックします。

注意： TCP 接続は、常に標準 NFS ポート (2049) を使用します。Oracle 9iFS NFS サーバーを代替ポートで実行している場合は、このボックスをチェックしないでください。

6. 「Default Authentication」で「System/UNIX」を選択して「Properties」ボタンをクリックし、「System/UNIX Authentication Properties」ダイアログ・ボックス (図 6-3 を参照) を表示します。

図 6-3 「System/UNIX Authentication Properties」ダイアログ・ボックス



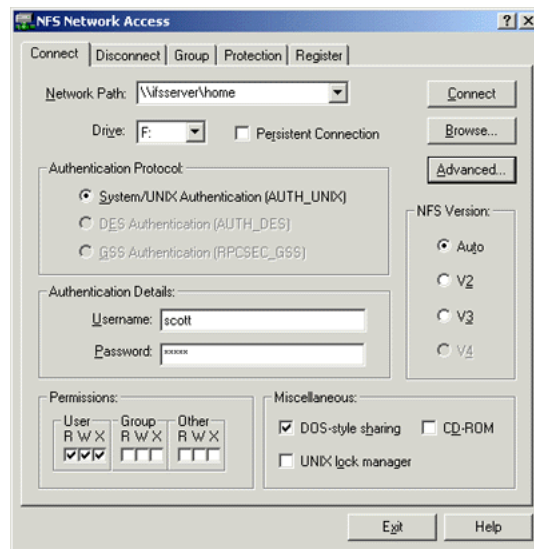
7. 認証サーバーの場所を入力して、「OK」をクリックします。NFS Maestro では、NFS サーバーにリンクする際に使用されるユーザー名とパスワードが、有効な UNIX ユーザー名およびパスワードであることを確認するために認証サーバーを必要とします。

NFS Maestro は、まず NFS サーバー・マシン上の認証サーバーへのアクセスを試行します。認証サーバーが NFS サーバー・マシンで実行されていない場合、NFS Maestro は、デフォルトの認証サーバーを使用しようとします。デフォルトの認証サーバーを指定する必要があるかどうかは、システム管理者に問い合せてください。

NFS Maestro Network Access Tool を使用した NFS ディレクトリへのリンク

1. 「NFS Maestro」フォルダから、NFS Network Access Tool を起動します。「NFS Network Access」ダイアログ・ボックスが表示されます (図 6-4 を参照)。

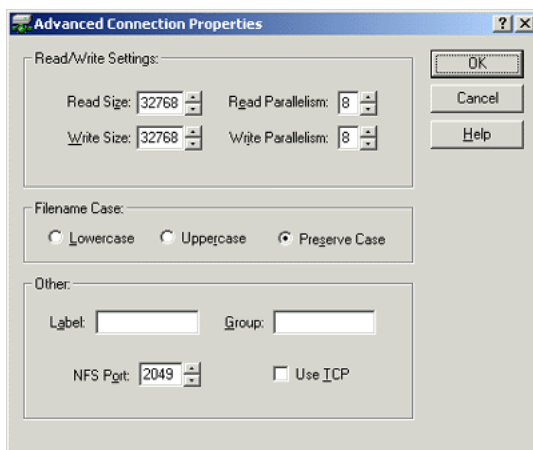
図 6-4 「NFS Network Access」ダイアログ・ボックス



2. 「Network Path」フィールドに、¥¥<host>¥¥<pathname> の形式で Oracle 9iFS NFS サーバーのホスト名およびパス名を入力します。
3. 「Authentication Details」で、Oracle 9iFS NFS サーバーへのアクセスに使用する UNIX ユーザー名とパスワードを入力します。「Authentication Protocol」として「System/UNIX Authentication」を選択します。

4. 「Miscellaneous」の値を次のように設定します。
 - **DOS-style sharing:** 通常、このオプションを設定して、NFS Maestro で DOS 形式のファイル共有をシミュレートすることを指定します。DOS 形式のファイル共有をサポートするには、NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンが実行されている必要があります。NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンが実行されていない場合は、NFS サーバー上のファイルへのアクセスが遅くなります。このような場合は、「DOS-style sharing」ボックスのチェックを解除します。
 - **UNIX lock manager:** Oracle 9iFS NFS サーバーには UNIX のロック・マネージャ (NLM) との互換性はありません。このボックスはチェックしないでください。
 - **CD-ROM:** 共有ディレクトリが CD-ROM または読取り専用ファイル・システムである場合に使用します。このボックスはチェックしないでください。
5. 「Advanced」ボタンをクリックすると、「Advanced Connection Properties」ダイアログ・ボックス (図 6-5 を参照) が表示されます。

図 6-5 「Advanced Connection Properties」ダイアログ・ボックス



6. 「Filename Case」として「Preserve Case」を選択します。
7. Oracle 9iFS NFS サーバーをセカンダリ NFS サーバーとして実行している場合は、NFS ポート番号を標準ポート番号 (2049) から Oracle 9iFS NFS サーバーが使用している代替ポート番号に変更します。
8. NFS サーバーへの接続に UDP 接続ではなく TCP 接続を使用する場合は、「Use TCP」ボックスをチェックします。

注意： TCP 接続は、常に標準 NFS ポート（2049）を使用します。Oracle 9iFS NFS サーバーを代替ポートで実行している場合は、このボックスをチェックしないでください。

コマンドラインを使用した NFS ディレクトリへのリンク

Oracle 9iFS NFS サーバーをそのホストのプライマリ NFS サーバーとして実行している場合は、次に示す NFS Maestro の `nfs link` コマンドを使用して Oracle 9iFS をマウントできます。

構文：

```
nfs link <drive>: ¥¥<host>¥<pathname> <username>
```

例：

```
nfs link n: ¥¥ifssserver¥home scott
```

Oracle 9iFS NFS サーバーがそのホストのプライマリ NFS サーバーではない場合は、Oracle 9iFS NFS サーバーのポート番号を明示的に指定する必要があります。次のコマンドを使用して、セカンダリ Oracle 9iFS サーバーをマウントできます。

構文：

```
nfs link <drive>: ¥¥<host>¥<pathname> <username> /n:<port_number>
```

例：

```
nfs link n: ¥¥ifssserver¥home scott /n:4049
```

その他のオプションの指定がない場合、`nfs link` コマンドは、NFS Maestro Client 用に設定されたデフォルト値を使用します。NFS Maestro Client が Oracle 9iFS 用に構成されていない場合は、次のオプションを使用して、Oracle 9iFS NFS サーバー用に適切な値を設定できます。

- `/L:s` DOS 形式での共有を使用します。このオプションを指定する場合は、NFS サーバー・マシンで HCLNFSD デーモンが実行されている必要があります。
- `/L` ロックを使用しません。HCLNFSD デーモンが使用できない場合は、この値を使用します。
- `/M:p` ファイル名の大 / 小文字を変換しません。
- `/A:u` System/UNIX 認証を使用します。
- `/T` UDP 接続のかわりに TCP 接続を使用します（オプション）。

注意： TCP 接続は、常に標準 NFS ポート（2049）を使用します。Oracle 9iFS NFS サーバーを代替ポートで実行している場合は、このオプションを使用しないでください。

トラブルシューティング

マウント時に「NFS サービスが応答しません。」とレポートされる

正しいホスト名とポート番号が指定されていること、および Oracle 9iFS NFS サーバーが実行されていることを確認してください。

マウント時に「アクセス権がありません。」とレポートされる

ホスト名とパス名が正しく指定されていることを確認してください。また、Oracle 9iFS NFS サーバーのポートが正しく指定されていることも確認してください。Oracle 9iFS NFS サーバーが標準ポート番号で実行されていない場合は、Solaris では 'public' オプションを指定し、Linux ではマウント・ポートを指定する必要があります。

注意： 「public」オプションは、Solaris 2.6 ではサポートされていません。

NFS Maestro Client が停止したように見える

DOS 形式の共有を使用しているがサーバー・マシンで `hclnfsd` デーモンが実行されていない場合、または UNIX のロック・マネージャを使用している場合は、NFS Maestro Client が停止したように見えたり、応答が極端に遅くなることがあります。「DOS-style sharing」および「UNIX lock manager」オプションのチェックを解除するか、またはコマンドラインで '/L:' と指定してください。

コマンド・プロンプトで、'`nfs use`' コマンドを入力します。これにより、NFS Maestro で現在マップされているドライブおよびそのパラメータが一覧表示されます。ロック・パラメータが '/L:' であることを確認してください。

NFS Maestro で「Network Timeout or HCLNFSD/PCNFSD not running on Host」とレポートされる

これは、NFS Maestro が認証サーバーに接続できなかったことを示します。`hclnfsd` デーモンが実行されているかどうかをシステム管理者に確認するか、またはデフォルトの認証サーバーが正しく指定されていることを確認します。また、[「NFS Maestro で「Bad Network Name」とレポートされる」](#)のトラブルシューティングの項も参照してください。

NFS Maestro で「Authorization Error」とレポートされる

ユーザー名とパスワードが正しく指定されていない可能性があります。認証サーバー上で有効な UNIX ユーザー名およびパスワードが指定されていることを確認してください。

NFS Maestro で「Bad Network Name」とレポートされる

ホスト名とパス名が正しく指定されていることを確認してください。これらが正しく指定されている場合は、NFS Maestro Rpcinfo ツールを使用して、NFS サーバー（プログラム番号 100003）がホストで実行されていることを確認します。NFS サーバーがホストで実行されていることを Rpcinfo で確認できない場合は、システム管理者に問い合わせて、NFS サーバーが実行されているかどうかを確認してください。

NFS Maestro の「nfs link」コマンドが停止する

正しいホスト名とポート番号が指定されていること、および Oracle 9iFS NFS サーバーが実行されていることを確認してください。

NFS Maestro で「Access denied by server」とレポートされる

Oracle 9iFS NFS サーバーのポート番号が正しく指定されていることを確認してください。

注意： TCP 接続は、常に標準 NFS ポート（2049）を使用します。Oracle 9iFS NFS サーバーを代替ポートで実行している場合は、このオプションを使用しないでください。

トラブルシューティング

この章では、インストールに共通する問題およびその解決方法を説明します。

- [インストール時の問題のトラブルシューティング](#)
- [Oracle Enterprise Manager の問題のトラブルシューティング](#)
- [オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問合せ](#)

インストール時の問題のトラブルシューティング

この項には、インストール時のエラーおよび問題の診断に役立つ情報が記載されています。
<drive>:\Program Files\Oracle\Inventory\logs\installActions.log ファイルには、インストールの際に発生したエラーが記録されます。
%ORACLE_HOME%\9ifs\log\IfsConfigOut.log ファイルには、Oracle 9iFS を構成する際に発生したエラーが記録されます。

クラスパスの障害

Configuration Assistant の実行中に「Oracle9iFS の CLASSPATH の検証に失敗しました」というメッセージを受け取った場合、Configuration Assistant が ORACLE_HOME を検索して、必要なライブラリを認識できなかったことを示しています。必要なライブラリが見つからない場合、Configuration Assistant は Oracle 9iFS の構成の続行を許可しません。

ojsp.jar ファイルおよび servlet.jar ファイルが見つからない場合、Oracle HTTP Server powered by Apache が、Oracle 9iFS がインストールされた ORACLE_HOME に正しくインストールされていません。Oracle HTTP Server powered by Apache は、Oracle 9iFS の必須コンポーネントです。

translator.zip ファイルが見つからない場合、Oracle JVM が、Oracle 9iFS がインストールされた ORACLE_HOME に正しくインストールされていません。Oracle の loadjava ユーティリティはこのライブラリを必要とし、Oracle 9iFS は loadjava ユーティリティを必要とします。

この問題を解決するには、Oracle データベースを再インストールします。Oracle8i データベース リリース 8.1.7.2 または Oracle9i データベースを使用し、「標準」インストールを選択します。これにより、すべての必須コンポーネントがインストールされます。

インストール時の一般的なエラー

通常、インストール時のエラーのほとんどは、インストール前の処理の指示に慎重に従っていないことが原因で発生します。次の表に、インストール時の一般的なエラー、考えられる原因および対処方法を示します。

問題	考えられる原因	対処方法
Oracle の構成テスト・プロセス (Oracle 9iFS Configuration Assistant) で、DBMS_JAVA パッケージに関するエラー・メッセージ	Oracle JVM パッケージが正しくインストールされていないか、または正常に動作していない。	2-9 ページの「作業 6: Oracle JVM がデータベースにインストールされているかの確認」に説明されているとおり、Oracle データベースに対してパッケージ名の問合せを実行し、必要な場合はインストールする。詳細は、Oracle9i のインストールおよび管理のマニュアルを参照。
データベース・オブジェクトの作成時のエラー	データベースを実行していないか、使用できない。または、リスナーを実行していない。	データベース・アクションの前に、データベースまたはリスナーを起動する。

問題	考えられる原因	対処方法
データベース関連のインストール・エラー・メッセージ	データベースを実行していないときに、インストールを開始した。 Oracle Text が正しく構成されていない場合に、Oracle 9iFS を構成しようとした。	インストールの開始前にデータベースを起動する。 および、tnsnames.ora ファイルと listener.ora ファイルの設定を確認する。
インストール時のアクセス権の問題	不適切なユーザーでインストールしようとした。	インストール時に書き込みを行おうとしたファイル・システムのアクセス権を確認する。 目的のマシンに Oracle9i をインストールしたユーザーと同じユーザーで、Oracle 9iFS をインストールする。
データベース・リソースが不十分なために、Oracle 9iFS サーバーに障害が発生する	init<sid>.ora の値が小さすぎる。	%ORACLE_HOME%\9ifs\log ディレクトリで、障害が発生したサーバーのログ・ファイルを確認する。init<sid>.ora ファイルを編集して、以前より大きい値を指定する。
ログ・ファイル %ORACLE_HOME%\9ifs\log\Node.log に書き込まれるデータベース・カーソルが不足する	init<sid>.ora 内の open_cursors の値が小さすぎる。	init<sid>.ora ファイルを編集して、open_cursors に以前より大きい値を指定する。
サーバーが遅い	チューニングを行う必要がある。	『Oracle Internet File System セットアップおよび管理ガイド』の第9章「Oracle 9iFS トラブルシューティングとパフォーマンス情報」を参照。

問題	考えられる原因	対処方法
「Oracle Text 構成を検証しています。」フェーズの際に Oracle 9iFS Configuration Assistant が停止する	ctxhx の構成に誤りがある。	<ol style="list-style-type: none"> 「Windows NT タスク マネージャ」または「Windows タスク マネージャ」を使用してオペレーティング・システムのプロセスを確認し、ctxhx が CPU の 80% 以上を使用しており、1 分以内に完了しないことを検証する。 ctxhx プロセスを中断する。 Oracle 9iFS Configuration Assistant を再実行する。 これで問題が解決しない場合は、次の 2 つのコマンドを発行して、Oracle 9iFS Configuration Assistant とは別に ctxhx をテストする。 <pre>cd %ORACLE_HOME%\ctx\bin ctxhx %ORACLE_HOME%\admin\sql\ifscctxtest.doc test.html</pre> Oracle 9iFS Configuration Assistant とは別に VerifyContext をテストする。 <ul style="list-style-type: none"> BLOB 列を持つ一時表を作成する。 この BLOB 列に Oracle9i Text 索引を作成する。 BLOB 列に単純な Microsoft Word ドキュメントを格納する。 Oracle9i Text 索引を同期化する。 ドキュメントの内容に対して問合せを発行する。 <p>次の 2 つのコマンドを発行して、VerifyContext をテストする。</p> <pre>cd %ORACLE_HOME%\9ifs\bin ifsenv \$IFS_JRE -classpath \$IFS_BASE_CLASSPATH oracle.ifs.tools.VerifyContext sys change_on_install %ORACLE_HOME%\9ifs\admin\sql\ifscctxtest.doc</pre> <p>(データベースが別のマシンにある場合は、オプションとして jdbc:oracle:oci8:@myTNSalias] などの JDBC 接続文字列を追加する)</p> VerifyContext の出力を確認して、エラーの原因を特定する。

Oracle Enterprise Manager の問題のトラブルシューティング

問題	考えられる原因	対処方法
Oracle Enterprise Manager コンソールを使用して Oracle 9iFS ドメインを起動できない	Oracle 9iFS に対して適切な Windows NT/2000 アクセス権限が設定されていない。	Oracle 9iFS の管理者アカウントに「バッチ ジョブとしてログオン」ユーザー権利を与える。詳細は、5-4 ページの「 Oracle Enterprise Manager の自動操作をサポートするための Oracle 9iFS の設定 」を参照。
Oracle Enterprise Manager コンソールで Oracle 9iFS ターゲット (Oracle 9iFS ドメイン・コントローラおよび Oracle 9iFS ノード) を検出できない	これらの Oracle 9iFS ターゲットのホストで Oracle Intelligent Agent を実行していない、または Oracle Intelligent Agent がターゲットを検出できない。Oracle Enterprise Manager でこれらのホストのリフレッシュを行っていない。	<p>Oracle 9iFS Configuration Assistant を実行する前に、インストール前の作業の一部として、<code>%ORACLE_HOME%\bin\emca</code> で Oracle Enterprise Manager のリポジトリを構成する。第 2 章「インストール前の処理」の「作業 8: 中間層マシンまたは Oracle9i ホームの準備」を参照。</p> <p>Oracle 9iFS Configuration Assistant を実行した後、インストール後の作業は、次の手順で行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Windows NT/2000 の「サービス」を使用して、Oracle 9iFS ドメインのすべてのホストで Oracle9i Intelligent Agent を起動 / 再起動する。 2. IA が Oracle 9iFS ターゲットを検出したかどうかを確認する。 <code>%ORACLE_HOME%\network\agent\services.ora</code> を確認する。そのホストに Oracle 9iFS ドメイン・コントローラを構成した場合は Oracle 9iFS ドメイン・コントローラのエントリおよびそのノードで構成したすべての Oracle 9iFS ノード (HttpNode を除く) のエントリを検索する。<code>services.ora</code> ファイルに、<code>oracle_sysman_ifs</code> および <code>oracle_sysman_ifs_node</code> のエントリがあることを確認する。 3. 次のファイルが存在することを確認する。 <code>%ORACLE_HOME%\network\agent\config\ifs.ora</code> <code>%ORACLE_HOME%\network\agent\config\ifs.tcl</code> <code>%ORACLE_HOME%\sysman\config\OEMClient.properties</code> に 9iFS のエントリがあるかどうかを確認する。9iFS のエントリがない場合は、<code>ifsoemsetup</code> バッチ・ファイルを実行する。 <code>%ORACLE_HOME%\9ifs\bin\ifsoemappsetup</code> も試行可能。 4. Oracle Enterprise Manager コンソールを開く。 <code>oemapp console</code> 検出ウィザードを使用して Oracle 9iFS ドメインのすべてのホストを検出またはリフレッシュする。

問題	考えられる原因	対処方法
Oracle 9iFS ノードの Oracle 9iFS ドメイン・コントローラでジョブまたはイベントが実行されない	OMS を実行するマシンで ifsumssetup を実行していない。または、パッチ・ファイルの実行後に OMS を停止して再起動した。	OMS を実行するマシンで、次の手順を実行する。 <ol style="list-style-type: none"> OMS が実行中の場合は、これを停止する。 ifsumssetup パッチ・ファイルを実行する。 OMS を再起動する。
2 番目の中間層 Oracle 9iFS サービスが起動しない。ドメインの起動後に、サービスが表示されない	TNS ローカル・サービス名が、Oracle 9iFS 構成時の TNS ローカル・サービス名と異なる。	中間層マシンの TNS ローカル・サービス名が、Oracle 9iFS 構成時に使用した TNS ローカル・サービス名と一致するように再構成する。TNS サービス名は、Oracle 9iFS スキーマにいったん格納され、検索されて、すべての中間層マシンで使用されるため、名前が一致しない場合は、Oracle 9iFS サービスが起動しません。

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問合せ

オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせる前に、次の事項を確認してください。

- ❑ 使用しているソフトウェア、データベースおよび環境の構成が、[第 2 章「インストール前の処理」](#)に記載されている構成に一致していることを確認します。
- ❑ CSI 番号（該当する場合）または詳しい連絡先情報（特別なプロジェクト情報、Oracle 9iFS とその関連製品の完全なリリース番号、オペレーティング・システム名とそのバージョン番号など）を確認しておきます。
- ❑ エラー・コード番号および次の事項を含む、問題の詳細な内容をメモにまとめます。
 - 発生したエラーまたは実行されなかった処理の内容
 たとえば、使用したコマンドとそれによって得られた結果などです。
 - エラーが発生したタイミング
 たとえば、システム負荷のピーク時、特定のコマンドの実行後、またはオペレーティング・システムのアップグレード後などです。
 - エラーが発生した場所
 たとえば、データベース・マシン上または Oracle 9iFS マシン上などです。
 - 問題の影響が及ぶ範囲
 たとえば、本番システムが使用不能になった、大きな影響はないが処理が遅くなった、またはほとんど影響がなく安定している、などです。

問題の発生時またはその直後に記録されたインストール・ログ、Oracle 9iFS ログ、Oracle Text ログ、トレース・ファイル、コア・ダンプおよび REDO ログ・ファイルをコピーします。オラクル社カスタマ・サポート・センターでは、問題を詳細に検討するために、これらのログが必要となる場合があります。

インストールに関連する問題では、この他に次の情報も必要になります。

- %ORACLE_HOME% およびステージング領域の内容のリスト（使用した場合）
- %ORACLE_HOME%\9ifs\log ディレクトリのすべてのログ・ファイル

オラクル社カスタマ・サポート・センターの連絡先は、次の URL から参照できます。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

索引

数字

9iFS

インストール, 3-1

起動, 4-3

9iFS ターゲットの検出, 7-5

D

DAV サーバー, 3-11

DBA 権限, 5-3

E

EMCA, 5-2

F

FileSync ユーティリティ, 6-5

インストール, 6-5

FTP サーバー, 1-4

H

HTTP Server, 1-5, 2-5, 4-2, 4-16

HTTP ノード, 1-5, 3-11

I

ifsConfigOut.log, 7-2

ifsconfig スクリプト, 3-3

ifsemalsetup スクリプト, 4-7

ifsen.v.sh ファイル, 4-15

ifsjservctl スクリプト, 4-17

ifslaunched スクリプト, 4-4

ifslaunched スクリプト, 4-4

ifsomssetup バッチ・ファイル, 5-3

ifsprops.properties ファイル, 4-16

ifssetup スクリプト, 3-15

ifsstartdomain スクリプト, 4-4

ifsstopdomain スクリプト, 4-4

Intelligent Agent, 1-6

開始, 4-2

停止, 7-5

J

Java Virtual Machine インタプリタ

変更, 4-16

Java VM, 1-5

JRE

1.3.0 の構成, 4-15

サポートされている構成, 4-15

Jserv プロセス, 4-16, 4-17

起動, 4-3

停止, 4-3

L

LOB データ, 3-9

O

OMS, 2-5

ステータスの確認, 5-4

停止, 5-4

OMS 管理者

パスワード, 5-4

Oracle 9iFS

ソフトウェアのインストール, 3-4

Oracle 9iFS Configuration Assistant, 3-3
Oracle 9iFS FileSync ユーティリティ, 6-5
Oracle 9iFS Portlet, 4-8, 6-3
Oracle 9iFS Windows ユーティリティ, 6-2
インストール, 6-2
Oracle 9iFS コマンドライン・クライアント・ユーティ
リティ, 6-6
インストール, 6-6
Oracle 9iFS の再構成, 3-3
Oracle Enterprise Manager, 1-6
Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant,
5-2
Oracle Enterprise Manager イベント, 1-7
Oracle Enterprise Manager クライアント, 2-5
Oracle HTTP Server, 1-5, 2-5, 4-16
Oracle Intelligent Agent, 1-6
Oracle JVM, 2-5
Oracle Management Server, 2-5
Oracle Partitioning, 2-5, 2-8
Oracle Text, 2-5
Oracle Universal Installer, 3-3
実行, 3-2
終了, 3-15
Oracle9i, 2-5
マニュアル・セット, vii
Oracle9i *interMedia* メディアの表領域, 3-9
Oracle9i Text キー・マップの表領域, 3-9
Oracle9i Text 索引の表領域, 3-9
Oracle9i Text データ, 3-9
Oracle9i Text データの表領域, 3-10
Oracle9i データ, 3-9

S

SDK
サポートされているバージョン, 4-15

T

TCP/IP サーバー・ソケット, 1-4
TNS サービス名, 2-10, 3-4

U

UTF8 キャラクタ・セット, 2-8, 3-13

W

Windows
9iFS クライアント・ユーティリティのインストー
ル, 6-2
Windows インタフェース, 6-2
Windows クライアント・ユーティリティ, 6-2

あ

アクセス権の問題, 7-3

い

インストール
9iFS ソフトウェア, 3-1, 3-4
エラー, 7-2
クライアント・パッケージ, 6-1
ディレクトリ, 3-2
問題, 7-1, 7-2
インストール後の処理, 4-1
9iFS の起動, 4-3
インストール前の作業, 2-6
インストール前の処理
Oracle8i データベースのインストール, 2-8
インストールに必要なプロセス, 2-11
作業, 2-6
インストール・ログ・ファイル, 2-7

え

エージェント
ガベージ・コレクション・エージェント, 1-4
エラー
インストール, 7-2

お

オブジェクト・データ, 3-9
オラクル社カスタマ・サポート・センター, 7-6
問合せ, 7-6

か

確認
データベース接続, 3-5
ハード・ディスク領域, 2-7

カスタム表領域, 3-8
ガベージ・コレクション・エージェント, 1-4
完全構成, 3-3
管理クライアント構成, 3-3

き

記憶域
 表領域, 3-9
規則
 表記, viii
キャラクタ・セット, 2-8, 3-13
 デフォルト, 3-13

く

クライアント
 Oracle Enterprise Manager, 2-5
 インストール, 6-1
クラスパスの障害, 7-2
グループ情報, 3-9

け

権限
 DBA, 5-3
検索機能, 2-5

こ

構成
 完全, 3-3
 管理クライアント, 3-3
構成タイプ
 選択, 3-3
構成パラメータ
 9iFS, 3-3
構成プロセス・ログ, 3-3
コマンド構文, viii
コンテンツ管理機能, 6-2

さ

サーバー
 DAV, 3-11
 FTP, 1-4
 HTTP, 4-2, 4-16

Oracle HTTP, 2-5
Oracle Management, 2-5
 エージェント, 1-4
障害, 7-3
 電子メール, 4-7
 プロトコル, 1-4

サービス名
 TNS, 2-10, 3-4
 ローカル, 2-10
サーブレット
 Jserv で実行, 4-16, 4-17
索引, 3-9
索引付けされたメディアの表領域, 3-9
索引付けされていないメディアの表領域, 3-9
索引付けする言語, 3-13

し

修正, 1-7
障害からのリカバリ, 1-5
障害検出, 1-7
情報
 グループ, 3-9
 ユーザー, 3-9

す

スキーマ
 既存のスキーマの使用, 3-6
 新規のスキーマの作成, 3-6
 名前付け, 3-7
スキーマのパスワード, 3-7
スキーマ名, 1-2
スクリプト (バッチ・ファイル)
 ifsemalsetup, 4-7
 ifsjservctl, 4-17
 ifslaunched, 4-4
 ifslaunchnode, 4-4
 ifsomssetup, 5-3
 ifsstartdomain, 4-4
 ifsstopdomain, 4-4

せ

全体バックアップ, 2-7

た

対象読者, vi

ち

チェックイン / チェックアウト, 6-2

中間層プロセス, 1-2

て

ディレクトリ

9iFS のインストール, 3-2

データ

LOB, 3-9

Oracle9i, 3-9

Oracle9i Text, 3-9

オブジェクト, 3-9

テキスト, 3-10

メディア, 3-9

データベース

キャラクタ・セット, 2-8, 3-13

停止, 7-2

バックアップ, 2-7

パラメータの設定, 2-10

データベース・カーソル, 7-3

データベース接続, 3-5

テキスト・データ, 3-10

デフォルト

キャラクタ・セット, 3-13

デフォルトの表領域設定, 3-8

電子メール・サーバー, 4-7

と

読者

対象, vi

ドメイン

9iFS の管理, 3-4

監視, 1-6

管理, 1-6

起動, 4-4

検出, 1-6

停止, 4-4

ドメイン・コントローラ, 1-2, 1-5, 3-11

起動, 4-4

トラブルシューティング

一般的なエラー, 7-2

インストール時の問題, 7-2

オラクル社カスタマ・サポート・センター, 7-6

ね

ネットワーク・インタフェース, 3-11

ネットワーク・ドライブ

マップ, 6-2, 6-6

の

ノード

HTTP, 1-5, 3-11

監視, 1-2

起動, 4-4

サーバー, 1-4

サービス, 1-4

非保護, 1-5

保護, 1-5

ノード・ガーディアン, 1-5, 1-7

は

ハードウェア要件

最小, 2-2

ハード・ディスク領域

確認, 2-7

パスワード

OMS 管理者, 5-4

スキーマ, 3-7

バックアップ

既存のデータベース, 2-7

全体, 2-7

ログ・ファイル, 2-7

パラメータ

9iFS の構成, 3-3

データベースの設定, 2-10

ひ

非 Unicode 対応プロトコル・サーバー, 3-13

非保護ノード, 1-5

表記

規則, viii

表記規則, viii

表領域, 3-8, 5-3
Oracle9i *interMedia* メディア, 3-9
Oracle9i Text キー・マップ, 3-9
Oracle9i Text データ, 3-10
Oracle9i Text 索引, 3-9
カスタマイズ前の作成, 3-8
カスタム, 3-8
記憶域, 3-9
索引付けされたメディア, 3-9
索引付けされていないメディア, 3-9
デフォルト設定の使用, 3-8
プライマリ, 3-9

ふ

物理構成, 1-2
プライマリ表領域, 3-9
プログレス・バー, 3-2
プロトコル
 WebDAV, 1-5
プロトコル・サーバー, 1-4

ほ

ポート
 デフォルトの番号, 3-12
 デフォルトの変更, 3-12
ポート番号, 1-5
保護ノード, 1-5

ま

マウント・サーバー・ポイント, 3-12
マップされたネットワーク・ドライブ, 6-2, 6-6
マニュアル・セット
 Oracle 9iFS, vii
 Oracle9i, vii

め

メタデータ, 3-9
メディア・データ, 3-9

も

問題
 アクセス権, 7-3

インストール, 7-2
トラブルシューティング, 7-1

ゆ

ユーザー情報, 3-9
ユーティリティ
 Oracle 9iFS Windows, 6-2
 Oracle 9iFS コマンドライン・クライアント・ユー
 ティリティ, 6-6

よ

要件
 ハードウェア, 2-2

り

リスナー
 停止, 7-2
領域
 ハード・ディスクの確認, 2-7

ろ

ローカル・サービス名, 2-10
ログ・ファイル, 2-7
 9iFS 構成プロセス, 3-3
 ifsConfigOut.log, 7-2
 インストール, 2-7
 バックアップ, 2-7
ロケータ, 1-5
論理構成, 1-2

わ

割当て
 ポートレットに表示, 4-8, 6-3

